

# 観光の定義の困難さについて

— 概念の脱構築から観光の周縁の記述へ —

吉田 竹也\*

「観光を定義することは困難である」。人類学的観光研究の嚆矢となった『ホスト・アンド・ゲスト—観光の人類学』の序論は、編者スミスのこの一文からはじまる。本稿の主題は、こうした観光の定義の困難さをめぐる理論的考察にある。

観光研究者の中には、観光研究の学際性、観光現象の総合的性格や時代変化といった点から、観光をあえて定義せずに観光研究を前進させる立場を採る者もいる。ただし、そうした研究者が、定義なしで議論を進めることの妥当性の根拠を論じているわけではない。また、一方で、観光の定義が困難であるとしても、定義なしで当の概念を使用し議論を進めることに懐疑的・否定的な立場の研究者もいる。おそらくスミスの立場は、後者の立場に相当すると考えられる。スミスは、定義が困難だと述べながらも、当該序論において観光を定義しているのである。しかし、スミスの観光の定義は批判的に検討されるべき点を抱えていると私は考える。

本稿は、スミスの定義のみならず、他の研究者による代表的な観光の定義が抱える難点・限界・問題を前景化し、観光を定義すること、つまり縮約した命題の束に還元することの困難さを確認する。その上で、そうした観光の定義なしで観光研究を進めることを可能ならしめるとされる3つの理論的・方法的可能性を、観光研究の外部に見出すとする。そして、結論として、観光の定義の脱構築に向かうのではなく、観光現象、とりわけ周縁的な観光現象の記述に向かうことこそ重要である、ということ論じる。

## キーワード

観光の定義、undefine する、中範囲の理論、パラダイム転換、周縁的現象の記述

## 目次

I 序論 問題の所在	2 橋本の定義をめぐる考察
II 観光論と「大きな理論」「現場の理論」	3 観光概念の再構成
1 パラダイム・理論・概念	4 捨てられたざわめきを明るみに出す
2 現代人類学における理論の位相	5 小結
3 観光論というフィールド	V 観光概念を undefine する
4 小結	1 定義をしない根拠の探究
III スミスの定義の再検討	2 規則の探究からゲームの探究へ
1 スミスの観光の定義	3 解釈学的認識と観光の合理化の探究
2 議論内在的な視点からの検討	4 社会システムとしての観光
3 現場の事実にも照らした再検討	5 社会の観光の人類学へ
4 小結	VI 結論 観光の周縁の探究へ
IV 観光の定義の脱構築へ	
1 橋本の戦略的定義	

\* 南山大学

## I 序論 問題の所在

「観光を定義することは困難である」(スミス 2018b (1989): 1)。『ホスト・アンド・ゲスト——観光の人類学』の序論は、編者スミスのこの一文からはじまる。日本の観光人類学を牽引してきた山下も、『観光学キーワード』の「観光の定義」の項において同様のことを述べている。「観光は総合的な現象であるために、観光を定義することは意外に難しく、また観光として考えられる領域も時代とともに変化するのだ」(山下 2011b: 6)。近年では、山口らが、「もはや行先や目的から「観光」を定義することは、じつに困難で」あり、「いいかえれば、どこでも観光地になり、何でも観光の対象になりうる時代、あるいは観光と無関係なものほとんどない社会が、すでに到来していると考えられる」としている(山口・須永・鈴木 2021: 3)。本稿の主題は、こうした観光<sup>1</sup>の定義の困難さをめぐる考察にある。

山下は、観光とは何かについては、研究者の間でも実務者の間でも合意がなく、合意ができる状況にもないと述べ、観光というカテゴリーは脱構築を待っている概念であるとするロジックとアリーの指摘に言及する(Rojek & Urry 1997: 1; 山下 2011b: 6)。ここでいう脱構築とは、明確な定義づけをしようとすればするほどそこからずれていかざるをえない、という事態を指すと考えられる<sup>2</sup>。山下は、他の著作でも観光を定義することを回避しながら論述を進めているといえ(ex. 山下 1996a (編), 1999, 2006, 2007 (編), 2009)、観光を一意的には定義できないという立場に一貫して立っていると考えてよい。彼によれば、観光は、観光者つまりゲスト側にとっては余暇活動であるが、これを受け入れるホスト側にとっては経済効果という観点からみられることがおおく、単に経済的現象ではなく、政治的でもあり、社会的でもあり、文化的でもあり、運輸や

ホスピタリティなどさまざまな産業が絡む、総合的現象である。ゆえに、観光研究すなわち観光学は学際的なものとなる(山下 2011a)。

このように、観光研究の学際性、観光現象の総合的性格、そして観光の時代変化といった点に鑑みれば、観光をあえて定義せずに観光研究を前進させようとする山下のスタンスは、十分理解できるものであろう。ただし、山下は定義なしでやっていくことの妥当性の根拠については論じていない。

一方、観光の定義が困難であるとしても、だからといって、まったく定義なしで当の概念を使用し議論を進めてよいものか、という疑問は残る。たとえば、前期ヴィトゲンシュタインは、『論理哲学論考』において、哲学が語りうるものを、言語による事実の写し取りとしての命題に分解しその規則を整序することによって、見極めようとした(cf. 野矢 2003: 229-231)。この著作の中で、彼は「定義とは、ある言語から他の言語への翻訳規則である。正しい記号言語はいずれも、そのような規則にしたがって任意の他の言語へと翻訳可能でなければならない。これが、すべての正しい記号言語が共有するものである」と論じる(ヴィトゲンシュタイン 2003 (1933/1918): 三-三四三)。こうして、定義は、学術を含む正しい言語の使用における共通のルールに位置づけられる。すくなくとも、基本概念の精確な定義づけが学術研究において必須の手続きであるという考え方は、一般に広く支持されている。

こうした視点に立つ観光論者のひとりに加太がいる。加太は、「観光概念の再構成」という論文において、「観光分野——それが現場であれ、理論研究であれ——において「観光」の概念を定めておくことは、一般的にいえば、当然の要請である」と述べる。そして、観光概念がこれまであいまいなたちでしか規定されていないことに触れつつ、あえて「ある種の綱渡り状態で」観光の定義を試みる(加太 2008: 27-28)。おそ

1 ここで、観光 (tourism) という語の意味について確認しておく。英語の tourism は、19世紀に人口に膾炙した語である。辞書を見ると、この語には、①観光旅行と、②観光業という2つの意味があることがわかる。日本語の観光は①の意味しかもたず、英語の tour や tourist もやはり①に関わる意味しかもたないが、tourism は、①来訪する観光者つまりゲスト側の行為と、②これを迎え入れるホスト側の行為の、両面を内包する語なのである (cf. 溝尾 2009: 13-15)。本稿では、「観光」という語を、ホスト側とゲスト側の関与の両面から成り立つ社会的行為、およびこの社会的行為の集合体としての社会現象を指すものとする(吉田 2022b)。これもまたひとつの定義と考えることもできようが、検討作業開始に当たっての暫定的なものであるとしておく。

2 谷川俊太郎の『定義』(谷川 1975) は、事物を正確に定義しようとするのが、その事物の中核的な意味の確定という本来の目的から逸れていき、いわば反定義に向かってしまう逆説を鮮やかに示しており、厳密に定義しようとするのが脱構築に向かうその実例を、デリダのような哲学者の立場からではなく、詩人の立場から実践した秀逸な詩集である。むろん、本稿の採るべきスタイルは、こうした哲学的・詩学的な脱構築ではなく、民族誌的事実の記述を通した、概念の脱構築というよりも議論とその立脚点の再構築と再確認である。

らく上記のスミスの立場は、この加太の立場に近いと考えられる。山下とは異なり、スミスは、定義が困難だと冒頭で述べながらも、当該序論において観光を定義しているのである。

スミスの観光の定義の内容は第三章であらためて明確にするが、さしあたりここでは、次の等式に彼女の観光の定義が縮約されていることを、まず確認しておきたい (スミス 2018b (1989): 1)。

$$\text{観光} = \text{余暇時間} + \text{自由裁量所得} + \text{肯定的な地元の承認}$$

観光は、観光者が余暇時間つまり可処分な時間と、可処分な所得とを有するとともに、そもそも観光を実行することが肯定的に承認されることで成立する、というのである。なお、この「肯定的な地元の承認」が何を指すのかは、スミスの説明では判然としないところがあるが、それについてはあらためて第三章第1節で触れることにする。

この定義は、今日の観光人類学や観光社会学の研究においてもしばしば言及されており (ex. 橋本 1999: 12-13, 2019a: 20; 安村 2001: 13-17)、いまでも研究者に受け入れられているといえる現状がある。すくなくとも、管見のかぎり、このスミスの定義を批判した研究は見当たらない。ホスト/ゲスト論の批判的再検討を主題とした石野の論考においても、スミスの定義は批判の対象となっていない (石野 2017: 48)。周知のように、『ホスト・アンド・ゲスト』は、1977年に刊行された最初の人類学的観光論集である (江口 2011: 63; 山下 1996b: 6, 1999: 7-8)。その後の民族誌的研究を補足的に記述し 1989年に刊行された第二版は、日本でも訳出され、しかし訳文の誤りもおおく、それが絶版となり、2018年にあらためて新訳版が出版されることになった。それは、この論集が人類学的観光研究における古典としての評価を固めているからでもある。この第二版においてもそのまま変わらず記載されたスミスの定義は、今日まで40年以上にわたって、観光人類学におけるひとつの有力な定義として生きつづけていると判断してよい。

しかし、私は、このスミスの観光の定義は批判的に検討されるべき点を抱えていると考える。すでに若干の点について拙論で論じたことがあるが (吉田 2013: 78-83)、本稿では、この拙論での見解を一部修正しつつ、この定義がはらむ問題についてあらためて整理し、

観光の定義の困難さについて確認したいと考える。

もっとも、スミスの定義を批判すること自体が本稿の目的なのではない。スミスの定義以外にも、観光の定義について論じた議論はあまた存在する (ex. 加太 2008; シュタイネッケ 2018 (2011/2005): 1-23; 溝尾 2009; 安井 2009; 安村 2001: 13-23)。そして、諸論が提起または言及するそうした諸定義は、いずれも何がしかの難点・限界・問題を抱えているように思われる。したがって、必要なのは、それら既存のさまざまな観光の定義が総体として示す困難を前景化することであり、スミスの定義の再検討は、重要ではあるが、その一角を占めるものにすぎない。そこで、スミスの定義の検討ののち、本稿ではそれ以外の代表的な観光の定義の若干を検討する作業へと論を展開していくことにする。

ただし、その作業は、結果的に、ロジェックらが喝破したように、観光の定義が脱構築のループに向かうことを具体的に再確認していくことでもある。こうして、本稿の議論は、観光の必要十分な定義の確定へと向かうのではなく、観光の十全な定義を得ることは困難であるという、冒頭のスミスや山下の立場を支持する暫定的な——というの、すべての観光の定義をチェックすることはできないからである——結論に達することになる。そして、その上で、観光の定義なしで観光に関する議論を紡いでいこうとする山下のような立場が、ではどのような観点から可とされるのかについて、私見を述べたいと思う。以上が本稿の議論の方向性である。なお、山下が触れているように、観光論は本来学際的なものではあるが、ここではさしあたり人類学を中心とした範囲で、観光の定義をめぐる「大きな理論」と「現場の理論」について考察を進めることにする。

第二章では、まず、本共同研究の枠組みの中に本稿の主題を位置づける。第三章では、あらためてスミスの観光の定義を取り上げ、これを批判的に考察する。そして第四章では、他の代表的な観光の定義について同様に検討する。そして、第五章では観光の定義なしで観光研究を蓄積させることの妥当性をめぐって若干の考察を行い、結論で議論をまとめる。なお、本稿における外国語を原書とする文献からの引用や要約は、邦訳書における訳文・訳語と若干ずれる場合があることを、あらかじめお断りしておく。

## II 観光論と「大きな理論」「現場の理論」

序論で述べたように、本稿の主題は観光の定義の困難さについて考察することにある。この章では、この主題を、「大きな理論」と「現場の理論」という本共同研究の設定に結びつける作業を行う。

### 1 パラダイム・理論・概念

まず、「大きな理論」と「現場の理論」の関係について整理しておきたい。私は、この2つをたがいに突き合わせるだけでは、両者の関係性を明確化することは難しいと考える。そこで、ここでは、理論と方法の関係、理論と事実の関係、概念と理論とパラダイムの関係、などを補助線として使用しながら、これらの術語の間の関係性の中にこの2つの理論が占める位置を画定しておきたい。

一般に、科学的な知識や認識は、定義によって明確化された概念つまりは術語を構成要素として成り立つ。理論はそうした概念および公理や定理などによって構成される。理論と方法とはかならずしも厳密に区別されえないものではあるが、人文社会科学において質的調査方法と量的調査方法とがあり、また人類学において進化主義理論、機能主義理論がある(あった)ように、理論と方法とをある程度は峻別することが可能である。たとえば、初期のルーマンは、「機能的な方法とシステム理論」において、ある科学理論が論破され反駁されたとしても、その理論を生み出した方法が直ちに失墜することにはならないと述べ、理論と方法を下位と上位の関係にあるものとして設定した(ルーマン 1983b (1974): 14-17)。ルーマンは、機能主義を理論ではなく方法の水準にいわば格上げする——その場合、機能は、社会学的な因果関係のニュアンスをはぎ取られ、等価な関数関係を意味するより抽象度の高い概念となる——とともに、この方法の下にシステム理論を再定式化するというパラダイム転換を提唱したのであった(ルーマン 1983a, 1983b (1974))。

パラダイムは、あるディシプリンや科学一般が歴史的に構築する概念・理論・方法の全体的な枠組みであると捉えておく。したがって、この意味でのパラダイムは、フーコーのいうエピステーメと互換的である(大澤 2019: 572; フーコー 1974 (1966))。クーンによるパラダイムの定義はもうすこし厳密なものであったが、一般にパラダイムという術語はそのような意味でもちいられてきたといつてよい。重要なのは、科学の歴史

がそうしたパラダイムの断続的な転換の累積から成り立っているという点である。研究者集団に一定のパラダイムが共有されている状態、すなわちクーンのいう「通常科学」の状態においては、このパラダイムが内包する方法・理論・概念が有効性を持ち、科学研究を先導する。しかし、通常科学によっては解決できないアノマリー(変則例)はつねに存在し、それが蓄積され、臨界量に達すれば、当該パラダイムは「危機」に陥る。複数のパラダイムがせめぎ合うこの状態を、クーンは「通常外科学」の状態と呼ぶ(クーン 1971 (1962); 野家 2007: 42-52, 2008: 142-192, 314-317)。そして、新たなパラダイムが妥当なものとなれば、当該科学はあらためて安定的な通常科学の状態に移行する。科学研究は、中長期的視野に立てば、こうした動態過程の中にある(野家 2008; ハンソン 1986 (1958); ラヴェッツ 1977 (1971))。クーンは、自然科学を主題としてこの議論を提示したのではあるが、歴史学や社会学の研究にも十分示唆を与えるであろうと指摘していた(クーン 1971 (1962): vi)。たとえば、ローティがこのパラダイム論をガダマーの「解釈学的循環」と絡め、人間が創造的に新たな世界観を更新していく過程を示すものと再定式化したように(富田 2016: 166-170; ローティ 1993 (1979): 375-455)、クーンのパラダイム論を人文・社会科学へと拡大解釈して適用することは、ある程度可能であると考えられる。

こうしてみると、「理論」にはおおきく分けて2つの次元を設定することができるということになる。ひとつは、ルーマン的な意味での方法や、概念などと相対的に区別される、狭義の理論であり、いまひとつは、概念や方法やパラダイムの次元を包摂した広義の理論である。私は、後者の広義の意味の次元で、本共同研究における「理論」を設定することにしたい。こうして、概念やその定義はこの広義の理論に包含されるものとなり、観光の定義をめぐる本稿の議論は、広義の理論を扱う研究であると位置づけられることになる。これが第1点である。その場合、クーンがパラダイム論で論じたように、この概念・理論・方法を含む広義の理論が、科学研究の歴史の中で変転するものであるということを、忘却してはならない。

次に、本稿において「大きな理論」と「現場の理論」をどのように画定するかという点に、議論を移そう。さまざまな捉え方があると思うが、私は、この2つの理論をひとつのスペクトラムにあるものとして捉えたいと考える。「現場の理論」は、「大きな理論」ほど抽

象化され体系化された理論でないが、現場において捕捉される「現場の事実」と、それにもとづいて組み立てられる一定程度抽象化された論点と不即不離のものである、と定位できる。いわば、理論としてさらに洗練され一般化されていく過程の段階にあるのが「現場の理論」である。そして、それは、マートンがいう「中範囲の理論」(theory of middle range)に相当するものでもある。「中範囲の理論とは、日々繰返される調査などで豊富に展開されている、小さな作業仮説と、経験的に観察される社会的行動の、非常に多くの斉一的な性質をできれば導き出すことができるような主要な概念図式を内容とする包括的思弁とを、媒介する理論である」(マートン 1961 (1949): 3)。新は、このマートンの主張の含意を、「社会システム一般の包括的な理論というのではなく、……具体的なデータに支えられて確実度の高い理論を作り上げること」にあるとする(新 2004: 171)。事実、マートンの研究は、抽象的に一般化されたパーソンズの理論とは異なり、さまざまな社会集団や社会的領域の具体的な事例に即した一般化を蓄積させていくものであった。

「大きな理論」は、この「中範囲の理論」の文脈依存性・事実連関性を希薄化させるとともに、その適用範囲をさらに拡大させ抽象化・一般化の程度や純度をさらに高めたものと考えることができる。あるいは、ギデンズの語彙を援用していいかえれば(ギデンズ 1993 (1990))、現場の事実「埋め込み」されてあるものが「現場の理論」であり、そこから「脱埋め込み」されてある、つまり離床しているものが「大きな理論」である、ということになる。「大きな理論」は、そうした現場の事実にならざるも直結しないところにある、超越的な概念・理論・方法・パラダイムからなる総合体である。図式化すれば、以下ようになる。

現場の事実 < 現場の理論 = 中範囲の理論  
< 大きな理論

このように、理念的に捉えれば、「現場の理論」と「大きな理論」の差異は、前者が「現場の事実」に結びついており、逆に後者がそこから離床し抽象度や一般性の度合いを高めたものである、という点にあることになる。これが第2点である。その場合、「現場の理論」を支える「現場の事実」とは、人類学的研究においては、フィールドにおける具体的な民族誌的事実であることはいままでもない。

概念やその定義に関していえば、そのあるものは「現場の事実」に結びついた「現場の理論」に相当するものであろうし、あるものは「現場の事実」から乖離した「大きな理論」に相当するものであろう。また、「タブー」や「マナ」のように、もともと「現場の事実」に結びついた「現場の理論」に相当する概念であったものが、一般性を獲得し「大きな理論」の水準へと移行することもある。ヴェーバーのいう「理念型」も、もともとは経験的事実をよりよく記述するための道具であって、理念型と現実との不一致が強調されていたが、のちにはそうした不一致はかならずしも強調されなくなり、それ自体が探究されるべき「大きな理論」に相当するカテゴリーとしての性格をもつようになった(シュルプター 2009 (1988): 24-33, 91-92; モムゼン 1994 (1974): 347-356, 2001 (1974): 25-41; 吉田 2020: 56-57)。

「大きな理論」と「現場の理論」ないし「中範囲の理論」との差異は、あくまで相対的なものである。また、「大きな理論」も、「現場の理論」「中範囲の理論」を経由して「現場の事実」つまりは個別的な民族誌的事実につながっているはずである。たとえば、ルーマンの社会システム理論は、高度に抽象的でありながら、ときに社会的・歴史的な事実の具体例と結びつけられて提示されている。しかし、他方で、すべての細やかな事実とのつながりを確保したままの「大きな理論」というものは想定しにくい。社会的・文化的な事実は、時代によっても地域によっても多様である。ある事実に着目した「現場の理論」が、それとは別の事実に着目した「現場の理論」を基盤としていた「大きな理論」の修正を迫り、パラダイム転換をもたらすという経過を、人類学を含む諸ディシプリンはたどってきたのである。

## 2 現代人類学における理論の位相

さて、ここで、現在の人類学というディシプリンにおける「大きな理論」と「現場の理論」について、若干の私見を述べておきたい。

私は、人類学というディシプリンの特性が、多様な文化と人が織りなすリアルなフィールドという「現場」に足場をおき、局所的な現象に焦点を当てる視点に立って、ボトムアップに人間の普遍性について考察しようとするところにある、と考えている。人間・文化・社会の幅広い領域の全体あるいは一部を研究対象とする人文・社会科学系の諸学問領域の中であって、

フィールドワークにもとづく民族誌的事実を基盤として、人々についての洞察を得ようとするのが、人類学なのである<sup>3</sup> (吉田 2021c, 2022a (2018))。とすれば、そもそも人類学における「理論」は「現場の事実」と切り離せないはずであって、「大きな理論」と「現場の理論」とを明確に峻別して設定することはできないはずだ、ということになる。これが第3点である。むしろ、レヴィ＝ストロースの構造主義や、進化主義のように、事実から離床したところで主知主義的に構築された理論も、かつてはあった。しかし、その種の抽象的・体系的かつ全体論的、狭義の意味での「大きな理論」は、現代人類学においては存在しないといってよいのではないだろうか。

この点で、人類学と社会学はいささか状況を異にする。社会学においては、ルーマンの社会システム理論や、ギデンズの構造化理論や再帰的近代化論など、現在も有効性をもち、考究されている「大きな理論」に相当するものを見出すことができるからである。とくに、ルーマンの社会システム理論は、20世紀後半に提示された普遍主義的で卓越した「大きな理論」であると、私は考える。ルーマン自身は、システム理論が「ひととき印象深いスーパー理論」であるとやや控えめに述べるにとどまるが (ルーマン 2020 (1984): (上) 17)。大澤は、ルーマンのシステム理論とともにフーコーの言説・権力論を現代社会理論のツインピークスであるとし、この2人に匹敵する理論は彼らの後に出てきていない、とする (大澤 2019: 614-621)。人類学における「大きな理論」の考究において、ルーマンそしてフーコーの理論の援用可能性の検討は、ひとつの有力な可能性をもつと考えてよい<sup>4</sup>。上で述べたように、今日の人類学では典型的な「大きな理論」が存在しないため、人類学の中だけで新たな理論の可能性を

探究することには自ずと限界があるからである。

ここで、あらためて人類学における主要な理論とその傾向について振り返っておきたい。さしあたり次の5点を指摘することができる。①19世紀から20世紀半ばにかけては、進化主義、伝播主義、機能主義、構造主義といった、時代を画する理論や方法が次々に隆盛した。しかし、それらの理論や方法は、それぞれ一定の限界をもつことが明らかになり、人類学のパラダイムはその都度転換していった。②その中で、1920年代以降現在まで、フィールドワークにもとづく民族誌的事実を基盤とする学問という性格づけを、人類学は固めていった (吉田 2003)。③1980年代、ポストモダン人類学によって、民族誌の記述をめぐるフィクションナリティが主題化され、フィールドワークにもとづく民族誌的事実を基盤とする学問というこの性格づけや、「大きな理論」にもとづいて人間の多様性と普遍性を把握するという大前提にたいする、リフレクシヴな検討がはじまった。これ以降、また、より広い視野に立てば、リオタールが「大きな物語の終焉」——これを「大きな理論」の終焉に重ねて理解することができる——を指摘して以降 (リオタール 2003 (1986/1979))、何らかの「大きな理論」をみなが支持するという体制は過去のものになったといえる (吉田 2003, 2007)。④このことは、たとえば『文化人類学15の理論』と『文化人類学20の理論』 (綾部 (編) 1984, 2006) を対比すれば、よくわかる。ポストモダン人類学が日本で消化吸収される前に刊行された『文化人類学15の理論』は、その15章の大半が「大きな理論」と呼べるものを紹介しているのにたいして、その消化吸収後に刊行された『文化人類学20の理論』は、時代状況を反映して、この学問全体におおきな影響をもった特定の「大きな理論」を紹介する前半の章と、新たに興

3 より正確に言えば、このような特性を有する研究をさしあたり便宜上「人類学」という名称で呼びたいということであって、実際にその種の研究は、人類学という分野をこえて、社会学、地理学、民俗学などにまたがって存在する。たとえば、ギデンズは、再帰的近代における人類学と社会学は区別がつかなくなっていると述べる (ギデンズ 1997 (1994): 186-187)。また、一般にヴェーバーは社会学者に分類されるが、ヴェーバーの議論を人類学的研究に引き寄せて捉えることも可能である (吉田 2016a)。

4 大澤は言及していないが、私は、フーコーのいう「反科学」も、着目すべき重要な方法であり認識であると考えている。フーコーのいう反科学は、科学の成立の根拠を問う科学、科学を根本から批判しようとするもうひとつの科学であり、客観的実在としての「人間」という一般的で普遍的なものを解体しようとする特徴をもつ。フーコーは、反科学の具体例として、精神分析学、文化人類学、言語学などを挙げる。ただし、当時も現在も文化人類学や言語学の中にフーコーのいう「科学」の契機は存在するのであって、フーコーの指摘をあまり鵜呑みにすべきでもない (フーコー 1974 (1966): 395-409, 2000 (1994): 226-227; 吉田 2013: 63-64, 2022a (2018): 33-35)。なお、これによく似た指摘は柄谷にもある。柄谷は、マルクス主義・アルケオロギー・現象学・人類学といった名称で呼ばれているものは、いずれもカントのいう「超越論的」(transcendental)であろうとする点にその共通の特性があるとする (柄谷 1989b: 190)。フーコーのいう反科学とは、特定のディシプリンのもつ性格というよりも、カント的な意味での「超越論的」たらんとするその態度を指したものと考えられる。私は、超越論的に科学の根拠や設定可能性を問おうとすることは、現場の事実即ち人間について省察しようとする人類学の基盤にすべき広義の理論であると考えている。

隆してきた人類学のサブ領域を紹介する後半の章——たとえば「現象学と人類学」「医療・身体論」「ジェンダー論」「観光人類学」など——との間で、章の議論内容の性質が変わっているのである。人類学理論を紹介したこの好著の構成のあり方に、誰もが承認する人類学の「大きな理論」をもちや確定しがたいという現状を看取することができる。⑤そもそも、これまでの人類学における主要な理論は、決して人類学という学問領域の中で産出されたものではなかった。進化主義は、人文・社会科学の諸領域を巻き込んだ、理論というよりも思想を背景とし、伝播主義も、歴史学や地理学などとの交差の中で展開したものであった。機能主義はデュルケームの社会学、構造主義はソシュールやヤコブソンの構造言語学を、民族誌的事実をあつかう人類学に適用し発展させたものであった。「文化」の概念規定も、その発端はパーソンズが社会システム理論の中に文化を位置づけたことにあったのであって、人類学者はパーソンズに促されてようやく文化の理論的定式化に取り組んだにすぎなかった(吉田 2007; Kroeber & Kluckhohn 1963 (1952); Parsons 1951)。このように、およそ人類学には、体系的な理論や方法を自前で生み出すという歴史を欠いていたとすらいい。

ただ、先に第3点として述べたことの言い換えではあるが、(1)人間の文化は地域により時代により多様であるという前提に立って、(2)その個別的な民族誌的事実を「現場」において捕捉する、という点は、なお人類学というディシプリンにおいて共有されていると考えられる。(3)人間の普遍性について何らかの考察を行う、という点については、これを支持しない、あるいは懐疑的な立場が、ポストモダニズム以降一定の支持を集めているが、こうした学問としての目的や方向性がかならずとも共有されなくても、(1)(2)を支持する、あるいはすくなくともこれを否定しないことによって、人類学はひとつのディシプリンとしてのアイデンティティをかうじて保持している、といえるように思われる。

このように、現在の人類学における「大きな理論」は、狭義の意味での理論とくに体系だった理論の次元ではなく、方法あるいは認識の次元にかろうじて、広く共有される内実をもっていると考えられる。これが第4点である。人間文化の多様性を前提とし、ゆえに「現場の理論」とその検証を積み上げていく、しかし、かならずしもその作業の彼方にあるはずの「大きな理論」

の具体は見通せないままである、というのが現在の人類学というディシプリンのあり方なのであり、これは学問としてはかなり奇妙な姿ではある。それが、クーンのいう「通常外科学」の状態といえるのかどうかは、ここでは判断を保留する。もう数十年もそうした状況にあるとすれば、それは現代人類学という奇妙な学問の通常の姿なのかもしれないからである。また、そうした状況は、人類学が反科学としての性格を色濃くもつがゆえなのかもしれない。ただ、このある種の奇形性が、序論でも触れた、観光の定義なしでやっていくという観光人類学的研究のあり方のひとつの背景であろうと思われる。

### 3 観光論というフィールド

ここまで、本章では、一般的な観点から「現場の理論」と「大きな理論」の関係を画定するとともに、現代人類学における「理論」の位相について述べてきた。ここでは、観光の定義に関する議論に入る前に、序論で設定した本稿の主題設定についてあらためて2つの点を確認しておきたい。

まず、以下で検討する観光の定義の性格についてである。序論で示したスミスの定義は、人類学的な民族誌的研究を集成した論集の導入部分に置かれたものではあるが、その定義は何らかの「現場の理論」や「現場の事実」に紐づけられたかたちで提示されたものではない。観光の定義の中には、スミスのそのような、現場の事実から脱埋め込みされてある「大きな理論」に相当するものもあれば、一定の現場の事実にも埋め込みされてある「現場の理論」に相当するものもある。重要なのは、そうした個々の定義のもつ性格に留意しつつ、これを吟味することである。『論理哲学論考』において、ヴィトゲンシュタインは、定義たるものは翻訳可能なものでなくてはならない、つまりは一般的で汎用性に富んだものでなくてはならない、と論じたが、かならずしもすべての観光の定義がそうした「大きな理論」としての性格を十全にもっているわけではない。「大きな理論」たる定義については、これをあらためて現場の事実にも照らし合わせ「再埋め込み」させる作業を通して、そうした定義の妥当性を確認していく作業を行う必要がある。また、「現場の理論」たる定義については、それが果たして一般的妥当性をどの程度もちうるのか、どの程度理論的純度を確保しているのかという点と、この定義にとってアノマリーとなるような現場の事実がどの程度あるのかという点

を、検討していく必要がある。

また、序論で触れたように、観光に関する議論は人類学というディシプリンの内部で完結したものではない。具体的に述べれば、社会学や地理学はもちろん、経済論・産業論・経営論・政策論などの社会工学系の立場など、さまざまなディシプリンにまたがり、それぞれの理論・方法・パラダイムにもとづいたものである。とくに、社会工学系の観光論は、一般に観光をいかに発展させるかという問題関心を基盤としており、観光という社会・文化現象の特徴を基礎研究の立場から——あるいは反科学の立場から——解明しようとする人類学やその周辺領域からの観光論とは、大枠の立脚点が異なっているという点もある。ただし、両者はたがいにまったく疎遠なものではない<sup>5</sup>。山下が構想・提示する学際的な「観光学」のように、たがいに刺激し合い参照し合う関係にあることも、また事実である。さらに、むしろ、あるディシプリンの中にも複数の観光論はある。したがって、こと観光論においては、ある「大きな理論」を頂点とし、その下に複数の「現場の理論」があるといった単純な「ツリー」モデルで、この2つの理論の関係を考えるべきではない。むしろ、複数のディシプリンにまたがる複数の「大きな理論」、たとえば観光の定義が、たがいに部分的に重なり合う「現場の理論」に結びついているという「セミラティス」モデルで、この2つの理論の関係を捉えるべきなのである (cf. 柄谷 1989a (1983): 33-41)。

以上のように、観光論は科学と反科学にまたがる複数のディシプリンの交差の中にある。ゆえに、観光の定義も、さまざまな立脚点にもとづいており、「大きな理論」に相当するものから「現場の理論」に相当す

るものまで幅広い。われわれは、そうした個々の定義のもつ性格に十分注意しながらこれを吟味しなければならない。これが第5点である。

ただし、そうした複雑な諸理論間の関係を念頭におきつつも、本稿では、社会工学系の観光論にまで射程を広げることはせず、人類学を中心とした範囲で、観光の定義における「大きな理論」と「現場の理論」について考察するにとどめることにする。諸ディシプリンにおよぶ観光の定義の総体が多種多様なものとなることは、ある意味で当然である。また、本稿の目的は、特定の有効な観光の定義を選別したり新たに見出したりすることにあるのではなく、逆にそうした有効な定義を獲得することの困難さを確認することにある。その目的のためには、いくつかの観光の定義を議論の俎上に載せることでさしあたり十分であろう。本稿では、人類学的研究に近い範囲を念頭においた観光の定義に議論対象を絞り込むことにしたい。それでも、観光の定義の多様性と困難さは確認できるであろう。この議論対象の絞り込みが第6点である。

私は、現在の観光論はパラダイム転換の時期に差し掛かっていると考えている。観光パラダイムにおけるアノマリーが次第に量的に増大しつつあるのが現代なのであり、それゆえ、スミスらの定義は21世紀の同時代における観光現象を十分捕捉できないものとなっていると考えられる。このことを、以下、観光に関する諸定義の検討作業から確認していくことにしたい。

#### 4 小結

本章のおもな論点を整理しておこう。①「理論」には狭義と広義の2つの次元を設定することができる。

<sup>5</sup> UNWTO (World Tourism Organization; 国連世界観光機関) の観光の捉え方も、その一例である。UNWTO の各種文書等の中から、2つの例に絞って見てみよう。まず、1999年の第13回 UNWTO 総会で採択された「世界観光倫理憲章」(The Global Code of Ethics for Tourism) では、人間と社会間の相互理解と敬意への貢献 (第1条)、個人と集団の充足感を得る手段としての観光 (第2条) といった点が、持続可能な開発 (第3条)、文化遺産の利用と価値増進への貢献 (第4条)、ホスト側の国や地域社会への貢献 (第5条)、などの点に先行して挙げられている (国連世界観光機関駐日事務所 2017)。また「TSA: RMF2008」(Tourism Satellite Account: Recommended Methodological Framework, 2008; 旅行・観光サテライト勘定) という、観光の統計的把握の方法枠組みを提示した文書 (2008年改訂版) では、序論の第1項に「需要側の現象としての観光は、訪問者の諸活動と、商品やサービスの獲得において彼らが果たす役割に言及するものであり、供給側からみれば、観光はおもに訪問者に向けられる一群の生産諸活動であると理解されるであろう。訪問者とは、1年未満の期間、その訪問先の国や場所において在住者により雇用されることは別のある主目的 (ビジネス、余暇、あるいは他の個人的目的) のために、彼/彼女の通常的环境の外にある主目的地へと旅する旅行者である」とあり、つづく第2項に「観光は、人の移動を伴う社会的・文化的・経済的現象である」とある (UNSD, EUROSTAT, OECD & UNWTO 2008: 1; <http://www.mlit.go.jp/kankocho/tsa.html>)。TSA: RMF2008は、経済論・政策論的な観点にもとづく文書であるが、冒頭で観光をホスト側とゲスト側双方に目配りしつつ社会・文化の面を含む総合的現象として定位している。UNWTOは、観光の経済・産業面そして政策面を主題としつつも、観光をその文化・社会面を基盤に捉えていることがわかる。なお、先行研究の中には、UNWTOの観光の捉え方を「定義」として紹介するものもおおいが (ex. 大橋 2013: 8-9; 岡本 2001: 5; 佐竹 2010; 白坂 2019; 竹内 2018: 2-3; 中村 2019: 7-8; 溝尾 2009: 17-18)、私は、UNWTOの各種の記述は、本稿脚注1の暫定的な観光概念の確認と同様、観光概念を作業上さしあたり規定したものであって、定義を目的としたものではない、と理解している。

本稿は、概念・方法・パラダイムを包摂した広義の次元の理論の中にある、観光の概念定義について考察することを主題とする。②「現場の理論」は、「現場の事実」に紐づいたもの、あるいは埋め込まれたものとしてあり、「大きな理論」はそこから脱埋め込みされ、抽象度や一般性の度合いを高めたものである。③人類学というディシプリンの特性は、「現場の事実」たる具体的で局所的な民族誌的事実を基盤としつつ、ボトムアップに人間について考察することにある。過去には現場の民族誌的事実から離床した人類学理論も存在したが、現代人類学において「大きな理論」と「現場の理論」とを峻別して設定することはできない。④人類学は、人類文化の多様性を前提としつつ、人間の普遍性について考察するものであったが、ポストモダニズム以降、後者の普遍性の探究という点を共有しない、あるいはこれに懐疑的な立場も存在する。現代人類学において共有される「大きな理論」は、狭義の意味での理論の次元に見出すことはできず、方法や認識の次元にかろうじて見出しうるにすぎない。現代人類学は、中範囲の理論の積み重ねを志向するが、具体的な狭義の「大きな理論」なしでやっていこうとする、かなり奇妙な体制にある。⑤観光論は、科学と反科学にまたがる複数のディシプリンの交差の中にあり、観光の定義も、さまざまな立脚点にもとづいているとともに、「大きな理論」に相当するものから「現場の理論」に相当するものまでである。⑥ただし、本稿では、人類学的研究に近い範囲での観光の定義に議論対象を絞り込んで検討を行う。

では、以下、いくつかの代表的な観光の定義を検討し、そうした定義が現代の観光現象の広がりを十全に捕捉しえないことを確認し、観光論がパラダイム転換の時期に差し掛かっているのではないかという、上に指摘した仮説を検討していくことにしたい。

### III スミスの定義の再検討

本章では、観光人類学の成立と発展に寄与した画期的な論集『ホスト・アンド・ゲスト——観光の人類学』（スミス（編）2018a（1989））における編者スミスの観光の定義を批判的に再検討する。前章で述べたように、スミスの定義は「大きな理論」に相当するものの一例である。以下、スミスの観光の定義を整理した上で、理論面から、そして現代の民族誌的事実との照合の面から、スミスの定義について検討を加えていくことに

する。

#### 1 スミスの観光の定義

まず、スミスの観光の定義についてあらためて確認することからはじめよう。スミスの「序論」は、「1 観光の特質——ひとつの定義」という見出しの節における次の文章からはじまる。

観光を定義することは困難である。というのも、ビジネス旅行者や会議参加者は、仕事と観光行動とを結合させることができるからである。しかし、一般に、観光者は、変化を経験することを目的として、ホームから離れた場所を、自らの意思によって訪問する、ひとときの余暇を有する者である。個人が旅行をする動機づけはあまたあり、またさまざまであるが、観光の基盤は、ひとつの等式を形成する3つの要素（それらすべてが重要である）にかかっている（スミス 2018b（1989）: 1）。

こうして観光の定義の困難さと観光者の定義に相当する記述が示された後に、本稿の序論であらかじめ記載した、右辺が3項からなる等式が提示されるのである。

当該序論の議論は、この観光の定義を論じた第1節で、余暇時間、自由裁量所得、旅行の承認、そして近年の観光のトレンドに触れたのち、「余暇活動のひとつの形態としての観光」を、余暇の活動・移動の種類によって、①民族観光、②文化観光、③歴史観光、④環境観光（エコツーリズムに相当すると考えてよい）、⑤レクリエーション観光（カジノ観光やセックス・ツーリズムなど）の5つに分類し論じる第2節、観光がホスト側の地域の経済や文化に与える正負のインパクトに言及する第3節、民俗博物館やテーマ村などに触れる第4節、観光者を冒険家・エリート観光者・大衆観光者など7つに分類し、そのホスト側の文化へのインパクトについて言及する第5節、からなる。第3節以降の議論は、類型論的であるとともに、論集の第1章以下の各論を念頭においたものとなっている。

ここで、まず指摘すべきは、スミスの議論が観光の定義についてアンビヴァレントな立ち位置にあるという点である。冒頭の一文を見ればわかるように、スミスは決して自身の観光の定義の妥当性を声高に主張してはいない。しかし、他方で、この序論の第1節は、その見出しからもわかるように、観光の定義を正面から論じたものとなっている。このスタンスのゆらぎが

第1点である。

次に、序論であらかじめ示した定義の第3項「肯定的な地元の承認」の含意について整理しておこう。この「肯定的な地元の承認」(positive local sanctions)、とくにそのlocalが何を意味するのかに関するスミスの説明は、きわめて漠然としている(なお、sanctionは承認や認可と制裁や処罰という肯定／否定両面の措置対応を含意するが、ここではこれを「承認」と訳す)。スミスの記述は、ある旅行の実践が是とされるか否かは、旅行の動機、旅行の種類、目的地によりさまざまであるということ、具体例に触れつつ述べるにとどまっている(スミス 2018b (1989): 2-5)。私は、これまで、「ホスト・アンド・ゲスト」という当該論集の主題に照らし、このlocalをホスト側の地域／地元を意味するものと捉えてきた(吉田 2013: 79-80)。しかし、スミスの該当箇所の記述に即すならば、それは正確な理解ではなかったと考えている。というのも、そこでは、国内観光がおもに取り上げられており、旅行者が自身と異なる文化的環境に移動する状況は想定されていないからである。また、旅行者の家族の承認、旅行同伴者の承認、観光者を多数生み出し送り出す社会や国の公共的承認と、その経済・政策的背景などにもっぱら言及がなされているという点もある。ただし、学生の貧乏旅行への言及箇所では、旅行先の人々の承認も含まれていると受け取ることはできる<sup>6</sup>。このように、「肯定的な地元の承認」は、観光が否定されずに実行されうるという意味での社会的承認を、ホスト／ゲストの区別や当事者／その周囲の人々／社会／国といった主体の性格や領域の広がりの違いを顧慮せず一括して「地元」と形容した、いわば未分節な概念化であったと考えられる。

さて、そのことを念頭において、この序論における定義とは別の箇所にある、スミスの観光の定義に相当する記述を確認することにしたい。当該論集の第1部「観光と余暇——理論的概観」の短い導入部分において、スミスは次のように述べる。「余暇のひとつの表

出たる観光は、自由に使えるお金と仕事から解放された時間とが蓄積されうる社会経済的環境を前提とする。移動の1形態たる観光は、ホームを離れ旅行に行くための文化的に承認される理由が存在していることを示唆する」(スミス(編) 2018a (1989): 24; cf. 安村 2001: 15)。すなわち、ここでスミスは、観光を余暇活動であるとともにホームを離れる移動の契機が伴うものとみなし、その余暇活動に必要な金銭と時間の確保といった社会経済的環境と、その移動行為が周囲に理解され承認される理由の存在といった点に即して、観光を理論的に説明している。

この第1部の導入部分にある「文化的に承認される理由」は、序論の定義の第3項「肯定的な地元の承認」と同義であると考えてよいであろう。ただし、前者の箇所では、余暇活動に必要な金銭と時間および移動に必要な周囲の承認が観光においては必要となる、というかたちの説明となっており、序論の等式には入っていないホームからの移動の契機への論及がある。このように、定義と題された序論の第1節の記述に、スミスの観光の定義が集約されているとはいいたいところがある。ただ、ここでは、それらを総合し、観光者が、①余暇つまり自由に使える時間と、②自由裁量所得つまり自由に使える金銭をもって、③ホームから移動しアウェイの地にある観光地を訪れるという行為が承認されることで、観光という現象が成立する、というかたちで、スミスの観光の定義を若干拡大・敷衍させたかたちで理解しておきたい。これが第2点である。

付言すると、『ホスト・アンド・ゲスト』初版刊行後に、スミスは『カレント・アンソロポロジー』誌において、「観光現象は、3つの要素——一時的な余暇＋自由に使える所得(disposable income)＋旅行倫理——が同時に生じたときのみ、生起する。ある文化のうちにおける旅行の肯定的承認こそが、時間と資源の使用を空間的または地理的な社会的移動に転向させるのである」と述べている(Smith 1981: 475; cf. Burns 1999: 26)。こうしてみると、スミスが、観光者が保持

<sup>6</sup> スミスは、学生の貧乏旅行に言及する際、ヨーロッパでは自身の教養を広げるために大学生が貧乏旅行をするのは適切だと考えられる——つまり肯定的に承認される——が、おなじような貧乏旅行を合衆国で試みるアメリカ人がいれば、疑惑をもって見られるだろう、と述べる(スミス 2018b (1989): 3)。このように、この記述箇所では、アメリカ人学生がヨーロッパで貧乏旅行をしたり、ヨーロッパ人学生が合衆国で貧乏旅行をしたりといった、学生の貧乏旅行をめぐる異文化交差ないし異文化接触を含む事例は挙げられておらず、それぞれの文化・社会の内部における貧乏旅行が並列的に挙げられるのみである。「肯定的な地元の承認」に関するスミスの記述においては、たがいに異なる背景をもつホストとゲストが織りなす観光という視点は捨象されているのである。ただし、この貧乏旅行の事例では、そうした旅行者を肯定的に承認するヨーロッパの人々や否定的に承認する合衆国の人々の中に、旅行先の人々が含まれると受け取ることはできる。この点で、スミスは、おそらく意図せずしてであろうが、ホスト側の人々の承認をも含んだ事例を記述している。

する余暇つまり可処分な時間と可処分な所得や金銭を、観光という社会現象が成立するための不可欠の要素と考えていること、ただ、第3の要素については、「旅行倫理」「文化的に承認される理由」「肯定的な地元の承認」などといった表記の間でゆれていること、がわかる。また、これらが、観光者の属するホーム側の社会における倫理／承認を一義的に指すことは明らかであるが、観光者にとってアウェイにある観光先における倫理／承認をどれだけ念頭においていたのかは、スミス自身がホスト／ゲストや観光者のホーム社会／アウェイたる観光地を切り分けた説明をしていないため、明確ではない。この第3項に関するゆれとあいまいさが第3点である。ただ、このことを踏まえつつも、第2点として示した①②③にスミスの定義のポイントがあると、さしあたりここでは捉えておくことにする。

## 2 議論内在的な視点からの検討

では、スミスの定義をめぐる議論に内在する論理的な問題を確認し、次に現場の事実たる観光現象に照らした場合の問題について考察する、という手順で議論を進めていきたい。

まず指摘すべきは、『ホスト・アンド・ゲスト』という論集の主題について論じた序論において、スミスが観光者を定義しているものの、ホストを定義していない、という点である。また、先述したように、観光を成立させる3つの要素のうち、余暇時間と自由裁量所得の指示する内容は明確であるが、「肯定的な地元の承認」が何を指しているのかはあいまいであるという点もある。この「承認」は、もっぱら観光者を送り出す側のホーム社会におけるさまざまな意味での旅行に関する肯定的対応やその社会制度的背景が念頭におかれているが、観光者を迎え入れるホスト側の社会の承認（拒否しないという消極的な承認も含めて）がまったく排除されているとまではいえず、内容に不確かさを残したものとなっている。

ただ、いずれにせよ、スミスの定義においては、ゲスト側に関する内容とホスト側に関する内容とがバランスよく盛り込まれているとはいえない。とりわけ、序論の説明と等式においては、ホスト側に関する明確な論及がないのである。右辺の第3項については若干の留保が必要ではあるものの、それら3つの項はいずれもゲスト側の人々や社会に関するものである。この等式に集約されるスミスの観光の定義は、ホストとゲストに等しく目配りしておらず、ゲスト寄りの視点に

もとづく偏向を帯びている。これが第4点である。

ほかにも、スミスの議論では、観光を行為として捉えているのか、社会的事実として捉えているのか、あるいは前者の観光行為が集合し社会現象となったものとして二段構えで観光という社会現象を捉えているのか（脚注1参照）、はっきりしないという点もある。さらに、自由に使える時間や金銭と周囲の肯定的承認があれば実行できるというのは、観光にかぎらず、およそあらゆる消費行為一般に当てはまるのであって、序論のスミスの等式は、観光という社会的事実の中身をそもそも説明したものになっていない、という点もある。ただ、社会的事実についてはさまざまな捉え方があり、中身に踏み込まない形式的な定義もまた定義のひとつのあり方ではありうる。そこで、これらの問題の追究は保留しておこう。ともあれ、この第4点や本章第1節で触れた第1点・第3点、あるいは第3項の「地元」という未分節な語用が示すように、スミスの観光の定義は、かならずしも論理的に十分練られたものではない。

なお、スミスの定義を離れても、観光を、余暇時間、所得や金銭、そして移動や肯定的承認などとの関連で定義するという考え方は、かなり一般的なものである。たとえば、長谷編集の『観光学辞典』における「観光」の項では、観光は「自由時間における日常生活圏外への移動をともなった生活の変化に対する欲求から生ずる一連の行動。「自由時間」は……余暇と呼ばれることも多い」と説明され、その欲求が情報に触発される場合が多いことや、思わぬ出会い／邂逅が観光成立の重要な要因であることに触れられたのち、「現代の観光は近代以降における旅行の商品化というコンテクスト（文脈）のなかで捉えることが、最もわかりやすい」とされている（玉村 1997: 1）。このように、玉村は、①余暇を有する者が、②旅行という商品を購入し、③日常生活圏外に移動する、という点に観光の基本的特徴を看取しており、その論点はスミスのそれとかなり対応する。また、岡本は、観光者の観光行動を規定する重要な要因として、①可処分所得、②余暇時間、③余暇にたいする価値観ないし意識の3つを挙げており、これもスミスの定義に近いものといえる（岡本 2001: 15-17）。

しかし、果たしてそうした捉え方は妥当なものであろうか。次に、現代の観光現象に照らして、先に第2点として整理しておいたスミスの定義の妥当性について検討してみたい。

### 3 現場の事実を照らした再検討

観光を、①余暇つまり自由に使える時間と、②自由裁量所得つまり自由に使える金銭をもって、③ホームから移動し観光地を訪れるという行為が承認されることで、成立する現象である、と定義した場合、これに当てはまらない観光行為の実態例をいくつも挙げる事ができる。これが本章の第5点である。以下、具体的な点を列挙する。

第1に、現代人は、かならずしも言葉の正確な意味での余暇あるいは遊びを、観光という行為のかたちで実践しているとはいえない。「余暇」は「労働」と対比される生活時間であるが(藤村 2008: 41-52)、家族旅行は、しばしば子をもつ父や母にとって義務的なもの一つの労働の様相を強くもつ場合があり(吉田 2013: 75)、何もしないゆとりや休息の時間は、観光とは別の時間として存在することもある。かならずしも観光イコール余暇であるとはいえないのが、現代人の生活の実態ではないだろうか<sup>7</sup>。

第2に、そうした義務的労働という点に照らすならば、観光が自由裁量所得によって成立するという点にも疑問が生じる。おおくの家族は、あらかじめ観光に必要な金銭を貯蓄し予算立てしておくのであり、それは、親にとっては義務的消費行為としての観光を実践する上での義務的支出(nondiscretionary spending)であると捉えるべきであって、自由裁量所得(discretionary income)とは論理的・実体的に正反対のものである。所得がなくても資産があれば観光は可能である。少子化・高齢化が今後いつそう進む日本においてはとくに、フローたる所得ではなく、資産に着目した観光経

済の把握が重要になるであろう(cf. 中村・三輪・石田 2021: 5; 吉田 2022b)。すくなくともスミスは「支出」に言及すべきだったのである。

また、現代において、観光は生活必需品的な消費行為としての様相を強化しつつある(吉田 2020, 2021a)。従来の観光研究では、ホスト側の貧困が取り上げられる一方(ex. 江口 1988; 江口・藤巻(編) 2010; 橋本・佐藤(編) 2003; Mowforth & Munt 2016: 333-357)、ゲスト側の貧困は主題化されてこなかった。それは、観光が経済的にゆとりのある人々の行為であった20世紀前半以来の状況に照らした理解枠組みが踏襲されてきたからであろう。しかし、消費社会化と大衆観光時代の到来以降、かならずしもゆとりがあるとはいえない人々が費用を捻出し、観光を行っている実態はある。また、イギリスやEUにおける貧困を主観主義の立場から主題化する研究においては、そうした必需品的消費に相当する項目に、定期的なレジャーや1週間の旅行が挙げられているという点も指摘することができる(阿部 2002: 77; Eurostat (ed.) 2012: 15-16; Guio, Gordon, Najera & Pomati 2017: 44; <https://www.mizuho-ir.co.jp/publication/column/2017/ch1208.html>; cf. 阿部 2008; 橋本・浦川 2006; 中川 2018; 西澤 2010, 2019; 吉田 2021a: 301-302; Townsend 1979)。日本の場合、EU諸国と同等程度の経済的・社会的水準にあるとはいえ、他方で就業者が中長期の休暇を取得することがやや困難な社会環境にあることもあり、まったく同様に考えることもできないが、携帯電話の所有や月に1度の友人／家族との会食などとともに、観光が重要かつ切望される消費項目になっている実態はありと考えられる<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> ホイジンガやカイヨワは、「遊び」を、日常生活とは異なる時空間における、自発的で自由な行為ないし活動であって、その行為自体を目的とする、歓びや満足の感情を伴うものとして捉えた(カイヨワ 1990 (1967/1958); ホイジンガ 2018 (1938); cf. 藤村 2008)。子どもを歓ばせることを目的とした観光は、親にとっての「遊び」ではないと考えることもできる。

<sup>8</sup> 2019年6月実施の内閣府「国民生活に関する世論調査」では、現在の自由時間の過ごし方の第1位は「趣味と娯楽」(51%)であり、「旅行」(22%)は第8位である。しかし、自由時間が増えたいことの第1位は「旅行」(48%)である。この数値や順位は、この問いが設定された2017年(平成29年)からほとんど変わっていない。また、同調査はコロナ禍の2020年度は中止となったが、2021年9月に実施された同調査では、現在の自由時間の過ごし方の第1位は「睡眠、休養」(52.9%)、第2位は「テレビやDVD、CDなどの視聴」(51.4%)、第3位が「趣味・娯楽」(37.5%)であり、「旅行」(9.7%)は第10位である。そして、自由時間が増えたいことの第1位は「旅行」(64.4%)である。数値や順位に、コロナ禍の影響がうかがえよう。ともあれ、コロナ禍以前から、現代日本人は、なかなか思うように実行できないものの、旅行を切望している、と受け取ることができる(橋本 2021: 139-141; <https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-life/index.html>; <https://survey.gov-online.go.jp/r03/r03-life/index.html>)。なお、他方で、貧困や社会的排除／包摂を主題とする観点から、阿部が2003年に全国の20歳以上の一般市民2000人を無作為抽出し行った調査では、「1年に1回の国内1泊家族旅行」を生活必需品的消費項目と考える人の割合は「月に2,3回の外食」とおなじ22%であり、かならずしも生活に不可欠なものとは考えられていないことがうかがわれる。ただし、この調査結果については、イギリスやオーストラリアにおける同種の調査と比べて、全体的に必需品と答える割合が低いという点に留意する必要がある。たとえば、オーストラリアで医療サービスを必需品と考える割合は99.9%であるが、日本では89%であり、暖房についてはそれぞれ89.0%と67%である。日本では、とくに子どもに関する必需品的消費項目を挙げる割合が低いという傾向もある。阿部は、その背景として、自己責任、清貧の思想、シンプルライフへのノスタルジックな憧れなどを挙げている。阿部の調査データは、日本人が欧米人に比べておおくの項目を必需品と認識しない傾向があることを踏まえて、受け止められるべきものである(阿部 2004, 2008: 180-192, 2011: 70-86)。

たとえば、私はフィールドワークの中で、夏季休暇を利用して年に1度バリに行き、毎年ほぼおなじような日程とルートでバリの複数観光地を訪れ、バリ在住の知人に会い、写真を撮り、バリでの短いひとときを満喫し、そうしてストレスのたまる職業労働が待ち受ける日本での日常生活にふたたび戻っていく、という日本人観光者に会っている。「毎年バリに来るのが楽しみで、残りの11カ月はバリの写真を見てバリを思いだしながら日本で過ごしている」という。彼にとって、ある年はひとりで、ある年は妻とふたりで、またある年は子どもとともに、20年以上つづけているバリ観光は、生きていく上で実行しなければいけない毎夏の通過儀礼のごときものなのである。

これら2点にも関わるが、第3に、現代人が自らの自由意志で観光を実践するその背後にある、社会的拘束のメカニズムに目を向ける必要がある。拙論で詳述したように(吉田 2020)、現代人は、情報社会化・消費社会化を伴った産業資本主義体制の拡大・深化の中で、中産階級をおもな顧客としたレクリエーション産業の発達を受け、余暇活動に財を傾注するようになった。この消費活動の興隆は、生活世界の植民地化(ハーバーマス)、再帰的メカニズムの徹底(ベック、ギデنز、ラッシュ)、個人化(バウマン、アドルノ)、監視文化・社会化(ライアン)、生権力と生政治のメカニズムの徹底(フーコー、アガンベン)、リスク社会化(ベック、ルーマン)、などの重層決定的なメカニズムによって支えられている(ex. アガンベン 2001 (1998), 2003 (1995); アドルノ 1996 (1966); ギデنز 1993 (1990); バウマン 2001 (2000), 2008a (2001), 2008b (2005/1998); ハーバーマス 1994 (1990/1962); 檜垣(編) 2011; フーコー 1986 (1976), 2006 (1994); ベック 1998 (1986), 2003 (2002), 2014 (1999/1993); ベック・ギデنز・ラッシュ 1997 (1994); ライアン 2002 (2001), 2010 (2009); ルーマン 2014 (1991); cf. 植村 2019)。現代人が余暇活動に財や時間を傾注し耽溺するのは、こうした支配のメカニズムの強化の中での心身のリスクの増大にたいする対処なのであって、ストレスのたまる日常から一時的に離れる観光というリフレッシュ行為は、これらが結び合うところに展開したひとつの選択肢にほかならないのである。

それゆえ、観光を単にひとつの余暇活動としてばか

り捉えるべきではない。端的に言って、観光は、生権力の全盛時代における心身の健康管理への配慮に由来する義務的行為なのである。別言すれば、観光者は、特定の目的地を選択し、自由に観光を謳歌する主体であるかもしれないが、同時に、よりよき生の享受を強いられている従属体でもある。この観光者の従属性と、彼らを受け入れるホスト側の人々の従属性——たとえば、ホックシールドは、心を商品化し精神的な主従関係・隷属関係を強いる労働のあり方を「感情労働」(emotional labor)と呼び、全身全霊を込めて顧客に心を尽くすことこそが感情労働の徹底であるとした——に観光研究は向かい合うべきであり(ホックシールド 2000 (1983); 吉田 2020, 2021c: 44-45)、観光の定義もまた、こうした局面を対象化すべきなのである。

第4に、ホームや日常生活圏からの移動を伴わないような観光行為はありえないのか、という点がある。ラッシュとアーリは、現代の「ポストツーリズム」に着目する観点から、家から一步も出ずにテレビやビデオなどの映像を通じた観光経験と、ある場所に移動し風景を消費する観光経験との間にはほとんど違いはない、と論じる。しかも、前者の方が環境の被害ははるかにすくないのであり、21世紀には仮想現実を経由した観光こそ、環境問題を解決する上で有力な選択肢となりうる、という。池田のいう虚構観光や、コロナ禍において拡大するヴァーチャル観光も、そうしたものに該当する(アーリ 1995 (1990): 179-180; 池田 1992, 1997; 松本 2021; ラッシュ・アーリ 2018 (1994): 253; 渡部 2021)。身体を移動させアウェイの目的地に向かうのではなく、自宅やホームの地であれこれの観光行為を(疑似的に)実践するその行為は、観光という行為の範疇の中に入らない、いわば観光未満の行為であろうか。私は、場合によっては、これも観光という行為の範疇に入れて考える余地はあるのではないかと考える。あまりに拡大解釈するべきではないであろうが、すくなくとも、こうした一步も移動しない観光行為の成立可能性は、新型コロナウイルス禍をも受け、情報技術がいつそう発展し仮想現実が社会の中に急速に浸透するであろう近い将来、視野に入れておくべきものであろう<sup>9</sup>(吉田 2021a)。

第5に、未来ではなく、むしろ過去や現在において、ホームから移動しアウェイの地にある観光地を訪れる

<sup>9</sup> この点も踏まえつつ、デジタル社会における観光の位相については別稿で論じたいと考えている。

という行為は、誰のいかなる承認を得て成立しうるのか、という点がある。これは、スミスの等式の右辺の第3項、および脚注1で暫定的に設定した観光の含意の、両方に関わる点である。本来、観光は、観光者つまりゲスト側の行為と、観光事業者つまりホスト側の行為の2つの両面が重なり合っただけではじめて成立するものであると考えられる。おおくの観光者で観光地がにぎわったとしても、ゲスト側がこの観光者を肯定的に受け入れ対応しなくては、観光者側にとって十分満足のいく観光経験は得られないのではないだろうか。スミスのいう「肯定的な地元の承認」は、観光者のホーム社会を中心とした各種の承認をひと括りにした概念であって、観光地となった地域におけるホスト側の承認を重視したものではなかった。しかし、観光者の周囲の人々や送り出し側の社会の承認だけではなく、彼らを受け入れるホスト側の人々や社会の肯定的承認——観光者を拒否せずポジティブに受け入れる——も、十全な観光現象が成立する上では見逃すことのできない重要な契機であるはずである。

もっとも、付言すれば、ホスト側が肯定的にゲストを受け入れなくとも、観光現象は成立しうるということもいえる。たとえば、佐滝や中井らは、京都などにおけるオーバーツーリズム現象を取り上げている（佐滝 2019; 中井 2019; cf. Du Cros 2007）。オーバーツーリズムは、ホスト側にとっての受け入れキャパシティをこえて観光者が来訪し、さまざまな問題が発生する状況を指す。そうした状況では、おおむねホスト側社会は地元の観光地化状況や多数のゲストの臨在を肯定的に受け止めてはいない。むしろ、すべてのホストがひとりのゲストも受け入れようとしなければ、その地で観光現象は成立しない。しかし、ゲストを受け入れるか否かは量と質の程度の問題であって、ホスト側にはさまざまなスタンスや見解の人々がいる。観光者の受け入れに肯定的なホストがごく一部にとどまる場合でも、観光現象は成立しうる。逆に、大卒のところでは観光者を受け入れているからといって、それをもってただちにホスト側の「肯定的な地元の承認」があると全体化して捉えることも、またできないはずである。マナーの悪い観光者の受け入れには否定的であったり、観光者は受け入れるがリゾートホテル建設には反対であったりする立場もある。そうした受け入れの質・量・程度がさまざまであり、決して一枚岩ではないホスト側の人々の「承認」のあり方という、スミスが十分論及しなかった論点を掘り下げることによって、個々の観

光現象の実態はよりよく理解されるであろう。

以上のような事例や実態に照らせば、スミスの観光の定義は、今日の観光現象が生起する「現場の事実」の広がりや内実からはいささか乖離したものだといわざるをえない。すくなくとも、観光者が、①余暇つまり自由に使える時間と、②自由裁量所得つまり自由に使える金銭をもって、③ホームから移動し観光地を訪れるという行為が承認されることで、観光という現象が成立する、というスミスの観光の定義の中に明確に取り込まれていない現場の事実や理論的ポイントがいくつもあるということは明らかであり、それらを考慮不要な例外的事例と考えることはできないはずである。

#### 4 小結

本章の議論をまとめよう。①観光の定義の可否をめぐるスミスのスタンスは、アンビヴァレントなものである。観光の定義は難しいとしながらも、その序論第1節の見出しからもわかるように、スミスは観光の定義に正面から取り組んだのだからである。②スミスの議論を総合すれば、観光者が、余暇つまり自由に使える時間と、自由裁量所得つまり自由に使える金銭をもって、ホームから移動し観光地を訪れるという行為が承認されることで、観光という現象が成立する、という点に、彼女の観光の定義をまとめて理解することができる。③ただし、スミスの観光の定義に関わる議論は、かならずしも序論において完結しそこに集約されてはいない。可処分な時間と可処分な所得や金銭が観光現象成立の不可欠の要素であるという主張は一貫しているが、第3の要素については「旅行倫理」「文化的に承認される理由」「肯定的な地元の承認」などの間でゆれており、それがゲスト側だけでなくホスト側における承認をも念頭においたものなのかはかならずしも明確ではない。④この定義は、論理的問題をも抱えている。スミスは観光者を定義しているがホストを定義してはいない。スミスの観光の定義は、ゲスト中心主義的偏向を帯びたものであって、①②③を含め、かならずしも論理的に十分練られたものではない。⑤また、現代の観光現象に照らしても、スミスの定義は妥当性を欠くものと考えられる。現代人が観光を、「余暇」というよりも義務的なもうひとつの「労働」として、「自由裁量所得」ではなく「義務的支出」を使って、実践している状況は、見逃すことのできない現実の一端である。観光を、生きていく上で必要不可欠な行為として実践する者もいる。生権力・生政治全盛の

時代に生きる現代人は、よりよき生の享受を強いられている従属体として、観光を実践していると理解することもできる。一步も移動しない観光行為の成立可能性を検討すべき余地もある。また、ホスト側のゲスト来訪にたいする肯定的承認は、観光現象成立において看過できない重要な契機である。⑥このように、論理的にも、現場の事実にも照らしても、スミスの観光の定義は十分妥当なものとはいえない。

『ホスト・アンド・ゲスト』は、ゲストと、ゲストとは異なる文化的背景をもつホストとの具体的な接触のあり方を記述し、人類学的な異文化理解の視点から観光を論じる枠組みを提示した画期的な研究であり、まさに「現場の事実」に即したかたちで人類学的観光論が向かうべき方向性を指し示したコンパスたる論集であった。しかし、ここで検討したように、スミスの定義自体は、多様な民族誌的事象から乖離したものであるといわざるをえない。もっとも、序論および本章の第1点で指摘したように、スミスのスタンスは両義的であって、自身の観光の定義に懐疑的でもあったのかもしれない。ともあれ、この定義は、人類学の立場からの観光の定義の初段階にあるものであった。では、章をかえて、その後の代表的な観光の定義についての検討に入ることにしよう。

## IV 観光の定義の脱構築へ

本章では、まず前半で、1990年代末に出版された『観光人類学の戦略』における橋本の定義について詳しく検討する。これは、人類学とその周辺分野においていまもしばしば引用される、代表的な定義のひとつである (ex. 加太 2008; 川森 2018: 210; 増田 2000: 11)。そして、章の後半では、他の2つの観光の定義をめぐる議論を取り上げ、観光の定義に関する考察について暫定的な総括を行う。

### 1 橋本の戦略的定義

まず、橋本の議論の概略を整理しておく。橋本によれば、これまでの観光人類学的研究は、できるだけ広い範囲の事象を「観光」の領域に取り込もうとしてきた。そうすることで、「観光」の領域はゆるやかに設定されるものとなる。ただし、それが「観光」を定義し研究する上でいかなるメリットをもつのかは、かならずしも明確ではない。そこで、橋本は、逆に、「観光」に特徴的な領域とその近隣の領域との差異を際立たせ

ることによって、すなわち、たとえば「観光」と「巡礼・参詣」、「観光」と知人・親類への「訪問」との間にある差異を際立たせることによって、前者の「観光的なるもの」を抽出しようとする議論方向性を選択する。これが彼のいう観光の「戦略的定義」である。そうした絞り込みによって、観光人類学は「自らの研究対象の消失を積極的に進める「自己解体の学」になる可能性も大きい」が、「一度絞り込んで対象を「つまらぬ要素」にまで解体する必要がある」のであり、それによって観光研究において「何が核心的問題であり、何が周辺の問題であるのかを明確にすべきときに来ている」というのである (橋本 1999: 9-11)。橋本の定義の特徴は、この核心的問題の捕捉という戦略的視点にある。これが第1点である。

こうして、「観光」は狭い意味に限定される。たとえば、修学旅行は学習のための旅行であって、観光ではない。新婚旅行は、結婚したてのカップルの儀式的な旅行であって、観光ではない。慰安旅行も、集団の慰安と内的結束のための旅行であって、観光ではない。巡礼もまた、観光とは別物である。それらに「観光的要素はあるが、旅行の主要な目的は観光よりもむしろ他にある (橋本 1999: 11-12, 62, 82-85)。では、その場合、「観光」はいかなるものと定義されるのか。橋本は次のように述べる。

本書では観光を、「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」であり、この「一時的な楽しみ」を、「本来の文脈から切り離され、集められて、新たな「観光文化」を形成する」ものとまず定義しようとする (橋本 1999: 12)。

橋本によれば、『ホスト・アンド・ゲスト』におけるスミスの観光者をめぐる定義 (前章参照) では、「楽しみ」と「消費」という2つの主要な概念が欠落している。観光では、「ほんの少し」の「一時的な楽しみ」が強調される。観光は、短期であろうと長期であろうと期限があり、一時的であるよう運命づけられている。また、内容により長短はあるが、そこで提供される楽しみは「ほんの少し」のものとなる。知る楽しみ、見る楽しみ、食べる楽しみ、触れる楽しみなど、さまざまなジャンルから「ほんの少し」の「寄せ集め」によって成立する観光は、ジャンル間の「境界の溶解」を前提とした、すぐれてポストモダン的な特徴を有するも

のである。「あらゆるジャンルが観光には取り込まれる」のである。その場合、それぞれの領域／ジャンルでは「深い楽しみ」が提供されうるのと対照的に、観光においては「ほんの少し」が提供され、専門的な深い満足が与えられることはない。「深い満足とは無縁で、「垣間見」ることを目的とし、かつそこに「楽しみ」のための売買つまり「消費」や非日常性といった特徴が組み込まれたものが観光であり（橋本 1999: 13-16）、「観光」は他領域との関係の中でのみ成立している」というのである（橋本 1999: 282）。

それぞれの時代や地域により、どのような要素が集まって「観光」の領域が成立しているのかは多様である。だからこそ、そうしたさまざまな領域との関係性をそれとして対象化しつつ、「観光」の核心を押さえておく必要がある、というのが橋本の主張である。その後、橋本の研究は、こうした認識の上に立って、みやげもの、観光体験、観光地域文化、地域づくり・まちづくり・人づくり、などを主題化する考究へと展開されている<sup>10</sup>（ex. 橋本 2011, 2018, 2019b（編））。

## 2 橋本の定義をめぐる考察

では、以下、この橋本の観光の定義について考察する。まずは、その議論に内在的な視点から検討し、次に橋本の議論に外在的な視点から検討することにする。

まず、橋本が上記の定義を「戦略」的目的から打ち出していることに着目したい。橋本によれば、観光は本質的に境界を浸潤する行為であって、観光のタイプをさまざまに分類したとしても、観光者のまなざしはそうしたジャンル間の境界には無頓着に向けられるものである。それゆえ、そうした分類やタイプ分けは、今日までの観光の発展過程をまとめるためには参考になるとしても、今日の観光の研究にとって有効であるとはいえない。「さまざまな要素が介入して形成される観光の今日的な問題を明確にするという戦略的な目的をもって」（橋本 1999: 55）、橋本は上に示した定義を立て、「観光」および「観光文化」——「観光の現場で人々が出会う文化」（橋本 1999: 3）——の実態の記述と把握へと向かうのである。このように、橋本の観光の定義は、今日の観光現象の多様で錯綜したあり方をいかに明瞭化し理解するのかという戦略的目的

に即して選択されたものであって、そうした目的ないし視点を離れたところで、過去から現在そして未来にわたるさまざまな観光現象の総体を一般化して捉えるものとして、提起されたものではない。当該著書の総括部分で、橋本は、「本書における「観光」の定義は十分とは言えないが、「観光」を扱うための方針をそれによって明確にはできる」とも述べている（橋本 1999: 283）。橋本の定義は、この特定の戦略的な目的や方針に紐づけされたものとして、その点での一定の限定性を伴ったものとして、設定されている。

別言すれば、橋本の定義は、序論においてヴィトゲンシュタインを引用しつつ確認したような、「任意の他の言語へと翻訳可能な汎用性をもった定義ではないのである。第II章で論じたように、広義の理論としての概念定義は、現場の事実埋め込まれたものから現場の事実から脱埋め込みされたものまで幅がある。橋本の定義は、さまざまな要素が介入して形成されている今日の観光現象という「現場の事実」に紐づけされたものであって、後者のような「大きな理論」に相当するものとはいえない。この限定的・非汎用的性格が第2点である。

さらに、橋本の定義は、あれこれの観光の実体的要素の次元ではなく、関係構造という形式の次元に、観光の定義されるべき特徴を定位するという特徴をもっている。観光は、さまざまな「本来の文脈」にある要素、たとえば、宗教、民族文化、芸術、医療、農業などを「ほんの少し」「寄せ集め」、売買ないし消費の文脈に組み込んだものである。それゆえ、従来の研究が着目してきたこれらの具体的な構成要素や特徴は、実は観光の核心部分とはいえない。それらは、観光の外の領域から越境し観光という領域に取り込まれたものにほかならない。私は、こうした論点に、今日的な観光現象の多様性をすくい取ろうとする戦略に裏打ちされた橋本の定義の独創性があると考える。あれこれの実体的要素にもとづいて観光を定義すれば、それに合致しないアノマリーたる観光形態はほとんど確実に存在すると考えられる。しかし、この橋本の定義は、形式論的な定義であるがゆえに、そうした実体的要素つまりは現場の例外的な事実にもとづいた批判からはかなりの程度免れることができるのである。これが第3

<sup>10</sup> 橋本の定義にある「一時的な楽しみ」を享受する主体は観光者であり、この点で当該著書の定義はやや観光者中心的な性格を宿していたともいえる。ただ、「観光文化」の形成主体はホストである。本文で言及した事後の一連の考究は、ホスト側を観光のまっつき主体として再組み込みする理論的関心に裏打ちされたものと受け止めることができる。

点である。

あらためて要約しよう。橋本は、観光の本質を、他の領域から一時的な楽しみをもたらす少量を寄せ集め、これを売買したり消費したりする点に見出している。要するに、観光は空虚な中心を特徴とした行為現象であるというのが、橋本の定義の核心にある主張なのである。とすれば、ここで想起されるのがレヴィ＝ストロースのmana論である。レヴィ＝ストロースがmanaを「内容のない形式」であるがゆえにいかなる意味内容をも帯びることができるゼロ記号として捉えたように（レヴィ＝ストロース 1973 (1968): 42）、橋本は観光をさまざまな楽しみの行為や意味が入り込むことによって社会に流通するようになったゼロ記号的消費行為現象として捉えた、といえるのである。

もっとも、観光をゼロ記号として捉えたことによって、観光という社会現象それ自体がどのような固有の具体的特徴をもっているのかは、この定義の中ではもはや重要な点ではなくなっている。それをあえて抽出すれば、「異郷において」「楽しみ」を「売買すること」が観光の具体的特徴として示されているということはあるであろう。ただ、ここで考えるべき点が2つある。ひとつは、こうした橋本が言及する具体的特徴をもたない形態の観光もありうるのではないか、という点である。たとえば、「異郷」に行かない観光、楽しみではなく悲しみを得ることを目的とする観光——ダークツーリズムについては本章第4節であらためて触れる——、ビジネスの文脈に乗らない観光などは、現在存在するといえるのではないだろうか。もし観光の特徴が純粹にゼロ記号としての形式的特徴にあると定位するのであれば、このような具体的特徴はむしろ定義において不要であるかもしれない。

もうひとつは、そうした具体的特徴をも備えた、あらゆる楽しみの要素をすこしずつ切り取って寄せ集めた社会現象は、果たして観光だけにかぎられるのか、という点である。橋本の議論においては、そのような形式的特徴をもった別の現象があるのかどうかは、議論の外部に置かれている。しかし、仮にそうした別種の現象があるのであれば、橋本の定義は観光の内的特徴を明示することには成功していても、外延を明確化し他と区別することにはかならずしも成功していないということになる。

私は、この定義に当てはまる他の現象はありうるのではないかと考える。たとえば、モースは、贈与論——レヴィ＝ストロースのmana論は、このモースの

贈与論をはじめとする論集の序文で提示されたものであった——において、ポトラッチやクラが法的・倫理的現象でもあり、奢侈的・消費的な経済的現象でもあり、宗教的現象でもあり、敬意の込められた審美的現象でもあり、社会統合に寄与する現象でもあり、それらのどれかに還元できない「全体」である、と論じた（モース 2014 (1923-1924): 437-445）。このモースの主張は、橋本の観光の議論に類似する。モースがそれほど強調していない点だが、クラやポトラッチにおいてもさまざまな楽しみは充溢している。また、ホストとゲストの関係に相当する、もてなす者ともてなされる者、見られる者と見る者に相当する関係の構図もある。モースがクラやポトラッチを「全体的社会事実」として解釈したのにたいして、橋本は、観光をさまざまな楽しみの要素の「部分」が集まっており、そのいずれかの部分に還元することはできない、いわば「部分からなる全体的社会事実」として定義した、といえる。その場合、モースの「全体的社会事実」概念が、こうした「部分からなる全体的社会事実」を排除した概念であるとはいえないであろう。このように、橋本の定義は、観光を具体的な内容に即して概念規定するものではないため、観光のもつ形式論的特徴をうまくすくい取ることはできているものの、他方で、同様の特徴をもった他の現象つまり全体的社会事実と観光とを十分に区別できないというアポリアを抱えている。これが第4点である。

以上のように、私は、こうした関係論的構造に観光の本質的特徴を見出した橋本の議論の独創性を高く評価する一方、その定義が形式論的なものであるがゆえの、定義としてのある種の脆弱性を抱えていることにも目を向けなければならない、と考える。

では、次に、橋本の議論に外在的な視点から、橋本の議論に盛り込まれていない論点について検討したい。さしあたりそれは2点ある。

ひとつは、観光の定義に動態論的な視点を加味する可能性である。序論の冒頭部分に引用した山下が述べているように、観光現象やそれがカバーする領域は時代とともに変化する。橋本が今日的な観光現象を捕捉する戦略に立とうとするのも、そうした点を踏まえてのことであろう。ただ、橋本の定義それ自体は静態論的な枠組みにあるといつてよく、変化に関わる契機を盛り込んだものではない。だが、観光がポストモダンの特徴を有するものであれば、観光を動態的な過程のただ中にある現象として再規定してもよいのではない

だろうか。たとえば、前章でも触れた点ではあるが、異郷に行くことが観光の重要な特徴として今後も維持されるかどうかは、かならずしも確実ではない。また、観光現象の同時代性への注目という点からさらに議論を推し進めれば、異なる時代を貫いて観光を定義できるとする前提についての懐疑論が展開される余地は十分ある。すなわち、さしあたりある時代において妥当な観光の定義を提示することはできても、時代をこえて妥当となる観光の汎用的な定義を行うことは困難であって、そうした一般論的定義を探究する議論の舞台から降りる方向へと旗幟を鮮明にする、という議論の方途が、橋本の議論の道筋の前方に垣間見えるのではないだろうか。以上が第5点である。

いまひとつは、観光現象がそれぞれの主体にとってもつ意味の差異を議論に取り込んでいく視点を加味する可能性である。スミスが編集した『ホスト・アンド・ゲスト』は、諸社会における観光現象を、ゲストつまり観光者側にとっての意味とホスト側にとっての意味との交差の中に位置づけようとするものであった。第III章で確認したように、スミスによるこの論集の序論での観光の定義自体は、ホストとゲストの関係を主題化した論集全体の枠組みや多様な民族誌的事実をかならずしも直接反映したものではなく、むしろゲスト中心主義的な偏向を内在させた「大きな理論」に当たるものではあったが、この論集が今日にいたるまで評価されてきた所以は、この観光主体による差異を民族誌的観光研究の基軸に設定したことにあつたと考えてよい。

観光は、それぞれの主体にとって異なる意味をもちうる複雑な社会現象である(吉田 2020)。コーエンは、こうした観点から、観光者の観光経験が、「気晴らし」や「リクリエーション」のモードから、現地の人々の生や価値観に共感し一体化しようとする「体験」や「実存」のモードまで、幅があることを指摘した。前者のモードは観光者自身の生き方や価値観からは疎遠な経験であり、後者のモードは観光者自身の生き方や価値観の根幹にインパクトを与えるような経験となる(遠藤 2006: 21-22; Cohen 2005b (1996/1979))。たとえば、バリ観光において火葬や神の行列にたまたま出くわした観光者の中にも、これを物見遊山のなまなごしで捉える者から、自らの社会・文化におけるものとは異なる生や死のあり方に接して魂を揺さぶられる者までがある(cf. 吉田 2019b: 96)。後者のモードのような、現地の人々の精神や生との「融即」の契機は(cf. レー

ナルト 1990 (1947))、橋本の定義する「観光」においては占める位置をもたない。しかし、橋本の定義においては「観光」ではないこうした経験をこそ望んだり、その経験を機にリピーターになったりする観光行為の実践者がいることも、また確かである。

別の例を挙げよう。沖縄本島南部にあるひめゆりの塔とそこに併設された平和祈念資料館は、ある観光者にとっては単なるひとつの観光スポットであり、ある観光者にとっては沖縄の歴史を体験的に知る上で欠かすことのできない訪問地であり、ある観光者にとっては小説や映画の「ひめゆりの塔」のコンテンツに関わる重要な訪問地である。また、ひめゆりの塔に記名された学徒隊の遺族にとって、そこは観光地というよりも、沖縄戦において従軍し戦死した死者を弔うとともに顕彰する、一種の墓のようなものである。さらに、戦争と平和に関心ある者にとっては、そこは自身が慰霊行為におよぶべき場所というわけではないが、単なる観光地というわけでもなく、平和について考える上で訪れるべきモニュメンタルな場所ではあるだろう。このように、ひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館は、歴史観光、コンテンツツーリズム、慰霊観光、平和学習などの多様な意味を同時にもった観光地であり、また(観光地には回収しえない)慰霊の地でもある(吉田 2019a)。ある観光地がもつ意味は多重かつ多層的であって、そうした多重の意味の複数がある人が同時に体験する場合もありうる。同様のことは、アウシュヴィッツ・ビルケナウや、アフリカ系アメリカ人にとってのガーナのエルミナ城などについても指摘できるであろう(ブルーナー 2007 (2005): 153-187; 吉田 2013: 74-75)。観光の現場におけるそうした多様な意味の存立とその混然一体性に、目配りすべき場合もあるように思われる。

また、観光者つまりゲスト側ばかりでなく、ホスト側においても、観光に関わる社会的事実とは異なる意味をもちうる。たとえば、バリ人にとって火葬や寺院祭礼は神聖な「宗教」活動であるが、観光振興をはかりたい行政や事業者にとって、それは重要な経済的資源でもある。そして、それをゲストが観光行為の対象として「消費」したり、あるいは「実存」経験として心に刻んだりするのである(cf. 川森 2018; ブルーナー 2007 (2005); Salazar & Graburn 2014: 13-16)。観光は、ホストとゲストの邂逅において出来る社会現象であるが(脚注1)、あるホスト/ゲストにとっての意味と別のホスト/ゲストにとっての意味は異なる可能性

がある。とりわけ今日の多様で錯綜した観光現象にアプローチする上では、こうした主体による差異を組み込むかたちで、観光という社会現象の複雑なあり様を理解する方向性が検討されてしかるべきであろう。たしかに、これをシンプルな定義の中に落とし込むことはきわめて困難な作業となる。しかし、だからといって、観光をさまざまな主体がさまざまな意味を付与したり受け取ったりする重層的経験の束として理解する議論の方向性が顧慮されなくてよい、ということにはならないはずである。これが第6点である。

その議論方向性に目を向けるならば、観光の定義という理論的問題からいったん距離を置くとともに、理解社会的・解釈人類学的な視点から観光を捉える「方法」やパラダイムとの接合可能性が探究されなくてはならない。橋本は、観光をひとつの統一的な実体として捉えようとする客観主義的立場に立脚している。おそらく、スミスもまたその種の立場に立っている。それにたいして、さまざまな当事者にとって異なるであろう観光のさまざまな意味を捉えようとする相互主観主義的な理解社会的・解釈人類学的な立場も、ひとつの選択肢としてある。そうした立場に立った場合、なすべき議論は、観光の概念規定よりも、そうした諸主体による相互主観的な理解のあり方に即した具体的・個別的な観光現象の記述的理解である。ここから、定義や一般理論を重視する議論方向性とはまた異なる、個性記述的 (ideographisch) な観光論の方途が開かれることになる (吉田 2013: 41-42, 2016a, 2016b, 2020: 13-32, 90-91)。

たとえば、観光振興が地域の経済にたいして果たす貢献をどのように捉えるかは、ホスト側の人々の中でもさまざまでありうる。現地の人々は一枚岩ではない。観光の恩恵——かならずしも経済的メリットに限定されない——を直接享受する人びととそうでない人々とがあり、また観光の経済への貢献度も比較的短い周期で変動することがある。ミクロな視点に立つならば、その地域のどの時点で誰に焦点を当てるかによって、その貢献度や、当該の観光振興の是非についての評価は異なると考えざるをえない。それゆえ、そうした差異を記述することは重要であろう (吉田 2013, 2016a, 2020, 2022a (2018): 37-38)。また、観光振興が環境にたいして与えるであろう負荷をどのように捉えるかも、ホストやゲストそれぞれの立場によって異なってくる。ある観光者は、営利追及型の「エコツーリズム」に魅かれ、これを実践するが、別の観光者は、そ

うした商業主義的観光は本来「エコツーリズム」と呼ばれるべきものではないと理解し、高額ではあっても環境に「やさしい」観光形態に魅かれ、これを実践しようとする。ゲスト側ばかりでなく、これを受け入れるホスト側においても、観光振興と環境保護のどちらをどの程度優先するかについては、さまざまな捉え方があり、これが現地在住者の間での論争を惹起することもある。今日の多様な観光形態の興隆は、ホストやゲストのさまざまな価値観や評価の多様性とその変化の産物であると同時に、その多様化や変化をもたらす誘因でもある。こうした多様な「現場の事実」の理解と記述に照準を合わせる議論の蓄積は、かならずしも一般論的な定義の確定に貢献するものではないとしても、「現場の理論」ひいては観光論全体を豊かにするものとなることは確実であろう。

ところで、こうした当事者の主観的意味に照らした場合、橋本が観光の周辺的な問題とみなすような諸要素がその観光形態の中核的な意味になりうる、ということも指摘できる。たとえば、人類学者のブルーナーは、1980年代に、自らが観光ツアーガイドとなって観光実践に積極的に介入するという実験的調査に取り組んでいた。おおくの観光者は、ブルーナーが彼らをバリの寺院の祭礼や舞踊の見学に連れて行っても、それにはあまり関心を示さなかった。しかし、ある観光者集団は、ブルーナーにうながされ、バリ式の正装をして寺院に入り、彼の解説を熱心に聞き、たまたまそこにいた彼の旧知の人類学者(ヒルドレッド・ギアツ)と会話し、バリ人芸術家の自宅を訪問するという、人類学者のフィールドワークに近い濃密な体験をし、これを印象深いバリ観光での経験として後日ブルーナーに語ったのであった (ブルーナー 2007 (2005): 14-15, 286-296)。

観光者もホスト側の人々も、さまざまな意図や関心をもって行為する多様な人々からなり、そうした主体の邂逅の中に生起する観光という社会的事実も、ミクロな視点に立つてみれば、多様な意味とその重なりから成り立っている。この、記述することに意義を見出すオルタナティブな観光論については、次章でまた補足的に触れることにする。

以上、橋本の定義にたいして、その議論内在的な視点と外在的な視点から、それぞれ検討を加えてきた。前章におけるスミスの定義の検討を合わせ、すでにいくつかの重要な論点を抽出することができているが、それらを整理する前に、本章では、これまでの議論の

延長線上においてあと2つ観光の定義を取り上げ、それらについて若干論点を絞ったかたちで検討することにしたい。

### 3 観光概念の再構成

本節では、序論でも触れた加太の「観光概念の再構成」(加太 2008)を取り上げる。

この論文の冒頭で、加太は「観光政策の策定に資することを期した観光概念の枠組み(内包)の再構成」がこの論文の目的であるとする(加太 2008: 27)。また、結論では、観光の枠組みを定めることによって、観光と観光以外の施策や実践——たとえば公共投資など——とを区別することがきわめて重要である、とする。このように、加太の定義もまた、橋本と同様に、一定の視点や目的に紐づけされたものとして捉えられるべきものである。

当該論文において、加太は、かならずしも妥当ではないと判断される既存のいくつかの観光の定義に言及し、それらが観光現象のある一部分のみを取り上げており、観光という現象の総体を捉えたものとはいえない、と指摘する。その上で、妥当と思われる定義の検討に入っていく。そこで取り上げられるのは、アーリ(Urry 1990)、橋本(橋本 1999)、ボワイエ(Boyer 1982)の議論である。ただし、アーリ自身が観光の定義について論じているわけではなく、そこで言及されているのは、『観光者のまなざし』の初版に記載されている諸点を加太が取り出しまとめたものである<sup>11</sup>。加太は、このアーリの論及する諸点をほぼ正確かつ簡潔にまとめているのが橋本の定義(本章第1節)である、と論じる。ただし、加太が一番妥当であるとするのは、ボワイエの観光の定義である<sup>12</sup>。加太は、この3者の議論を踏まえつつ、次のような定義を提示する(加太 2008: 28-31)。

観光とは、近代市民社会の定住者が、一時的に離郷し、有償を前提として気軽に楽しむために、他郷の風物を見に行き短期間滞在をする現象に関わることどもの総体である(加太 2008: 31)。

ただし、これだけでは厳密な定義とはいえず、この定義にもちいられた概念や用語の説明が必要であるとし、ここから当該論文は、観光概念のさらなる解明・解説へと議論を展開していく。

まず、加太は、観光は3つの概念で構成されるとする。すなわち、(1)観光者の実践つまりは行為、(2)観光地や観光資源により構成される観光空間、(3)知識・言説・情報などからなる観光媒体、である。観光は、この3つの相関関係の網目から析出される現象である。近代社会市民は観光者へと変容し、日常空間は観光空間と互換的そして重層的な関係にある。そしてそれらを観光媒体が覆っている。あらためて注意すべきは、観光は、いかなる局面においても実態ではないということである、と加太はいう。たとえば、「観光者」はアプリオリに存在するわけではない。ある契機を境に人は観光者になるということだけである。観光媒体も、社会的・時代的な関係の中に出出するものの一部である。観光は、これらの網目の総体が、以下の8つの命題ないし必要条件の複数の組み合わせによって成り立っている現象である(加太 2008: 31-32, 48-49, 53-54)。

その8つの命題のうち、前半の4つはほぼ「事実」に相当するものであり、後半の4つは必要条件に相当するものであって、後者はそれぞれの観光現象により強弱の程度が異なるものとなる。以下、列挙する。①観光は、近代的・経済的社会に生活する者の実践である。近代以前に観光という社会現象はなかったといえる。②観光は、定住者が行う行為である。本来の生活スタイルがノマドである者が移動しても、観光は現象化しない。③観光には、他郷への意図的離郷が伴う。

11 なお、安村のように、アーリのこの著作を、観光の本質の解明に正面から取り組んだものではなく、さまざまな社会的文化的要素が絡み合った観光の複雑さを示そうとしたものであると理解する立場もある(安村 2004: 10; Urry 1990: 135, 2002: 12)。私も安村の理解に近い認識をもっている。

12 加太はボワイエの定義を次のように訳出する。「観光は、常住地域の外への旅行と一時的滞在から帰結する現象の総体である。ただし、その移動が余暇の中で、近代産業文明における文化的欲求を満足させるものであること」(加太 2008: 31; Boyer 1982: 231)。なお、当該著書を継承・発展させた別の著書の邦訳では、この定義は次のようになっている。「観光とは、移動が産業文明の文化的欲求を余暇において満足させるように思われる場合、人々が住居を離れて一時的に行なう旅行や滞在から生じる現象の総体である」(ボワイエ 2006 (2000): 2)。なお、この邦訳書の中には次のような定義もある。「観光：楽しみのための旅行に適用される言葉。この種の旅行を実現するために行なわれる人間の活動の総体。観光客の欲求を満足させるために協力する産業」(ボワイエ 2006 (2000): 40)。私は、観光が行為でもあり産業でもある点と、観光者の欲求を満足させるホスト側にも目配りしている点で、ボワイエのこの後者の定義にも注目しておきたいと考える。

観光には、ホームや生活圏から離れることが必須である。④観光は、一時的である。それが長期におよべば、たとえば放浪や移住となる。⑤観光は、「観る」ことが中心である。⑥観光は、対象を消費する。⑦観光は、普通の人々がなす軽快な行為である。たとえば経験者が実践する登山は、一般的な観光者向けの商品にはならない。⑧観光は、快楽である。これらの8つの複数が絡み合った現象の総体が観光なのである(加太 2008: 31-47, 53)。なお、この中で、⑤についてはアーリの議論が、⑥⑧については橋本の議論が、それぞれ参考になるであろう。

加太は、「観光」の定義に入らない類似概念が数多く混在しており、それによって「観光」論が混乱している、と述べる。巡礼など、観光が主目的ではなく、付随的に観光が行われるものがあるが、それらは観光と区別されるべきである。また、おおくの自治体では、観光は経済振興と結びつけられているが、観光はかならずしも「経済」や「経営」の対象ではない。観光は、その本質においては文化現象であって、人々の意味付与や意味の解釈の楽しみに関わる事柄である、という(加太 2008: 34-35, 47, 54)。

以上のように、加太の議論は、観光政策を念頭においた視野に立つものの、観光を文化現象とみなし、観光の諸特徴に幅広く目配りしたものとなっており、人類学やその周辺領域における基礎研究の立場からの観光論に親和的といえる。また、「観光度」(加太 2008: 42)という表現が示すように、加太は、ある社会現象がいわばどの程度「観光的」であるかを考察する視点にも触れている。この点が議論として展開されているわけではないが、この「観光度」という切り口は、観光と観光でないものとの境界づけやその困難さについて、議論を展開する余地を示すものと考えられる。

そうした可能性の一方で、加太の観光の定義は若干の難点や疑問点を抱えていると考えられる。ここでは3点述べる。第1に、「観光度」に言及するにもかかわらず、加太の定義は、8つの命題ないし必要条件がいかにもどの程度絡み合えば「観光」であり、どの程度絡み合いが低ければ「観光」ではないのか、という基準を明確にしていない。ひとつでもあれば観光と考えてよいのかについても、明確な言及はない。この点で、この定義は厳密さを欠いている。

第2に、命題の②③④にあるように、加太は観光者を定住者にほぼ限定している。「ノマドが移動することで観光は現象化しない」(加太 2008: 33)と加太は明言する。しかし、ノマドに相当する人々であっても、観光に相当する実践の主体となる可能性や実態はあると考えるべきであろう(cf. 溝尾 2009: 18-19)。また、貧富の格差が強まる現代社会において、相当数の定住者がある日からノマドに相当する存在へと転化している現実もある(ブルーダー 2018 (2017))。人は観光者にもなるが、広い意味でのノマドにもなるのである。観光者を安定したホームに居住する人々に限定することは、観光者の多様な広がりや定義の中に収めることを困難にさせると考えられる。

第3に、3つの概念と8つの命題の内容が示すように、加太の定義は、大衆観光の諸形態をカバーしているものの、いわゆるオルタナティブツーリズムや、ヴァーチャルツーリズム、あるいはコーエンのいう実存モードなどを「観光」の外部に位置づけるものとなっている。たとえば、必要条件の⑧に関連して、加太は「真面目さは、観光をその本質から遠ざける」(加太 2008: 47)と述べる。たしかに、一般的な観光は余暇活動・娯楽活動という性格を前面にもった社会的行為ではある。しかし、まじめさと快楽は相互排他的ではない。ある種のエコツーリズムやアグリツーリズムなどの体験観光は、いくばくかのまじめさがあってはじめて成立し、そのまじめさが快楽につながる種類の観光形態であると考えられる。市野澤が論じる、リスクを資源化したダイビングツアーにおいても、インストラクターと観光者の間にまじめさが共有されていることが必須の条件となる(市野澤 2014)。むろん、⑧はすべての観光形態に必然的に伴うものではないのであろう。しかし、加太の観光の定義では、ここで触れているタイプの観光実践は議論枠組みの外に置かれることになる。

こうしてみると、加太の定義は、新たに勃興してきている現代観光の多様な諸形態をかならずしも十分取り込んだものとはいえない。それは、おそらく、加太がアーリの初版の『観光者のまなざし』を参照し、近代現象としての観光について考察しようとしているからである。ただ、私見では、加太が参照したアーリ・橋本・ボワイエは、それぞれ視点が微妙に異なってい

る。アーリはおもに近代観光<sup>13</sup>、橋本は現代観光、ボワイエは、とくに邦訳された著書（ボワイエ 2006 (2000)）において、その2つの時代の間の変化を、それぞれ念頭において議論を提示している。この点で、近代的現象としての観光をおもに念頭におく加太の議論と、今日的／現代的現象としての観光に照準を当てる橋本の議論との間に、定義の中身の微妙な差異が生じるのは当然である。ただ、それは、時代を超越した観光の一般論的定義が困難であるということ、はかからずも示したものと受け取ることもできる。いずれにせよ、加太の議論は、橋本のそれとは異なり、実体論の次元で観光のあれこれの特徴を明示する定義を採用したことによって、その定義にとってのアノマリーの存在を浮き彫りにするものとなっている。

#### 4 捨てられたざわめきを明るみに出す

最後の例として、須藤と遠藤の共著『観光社会学2.0』（須藤・遠藤 2018a）の議論を取り上げよう。

須藤は、当該著書の序章において「観光とは、レジャー目的、ビジネス目的およびその他の目的で、1年を超えない期間において、自己の定住圏以外の地域を訪れ、滞在することである」というUNWTOの観光の「定義」に触れながら<sup>14</sup>（本稿脚注5参照）、「観光」がビジネスをも含む日常の行為であること、かぎりなく移動（mobility）に近いこと、これまで観光は移動を伴う非日常経験として捉えられていたが、今日では非日常経験と日常経験とは混合し流動的なものとなりつつあること、しかし観光において非日常性の追求はなお不可欠であること、を確認する。そして、観光を「日常生活圏からの移動をとめない、何らかの非日常性を含む経験」と定義する（須藤 2018a: 16-18）。このように、須藤の議論は、スミスとはまた別のかたちではあるが、アンビヴァレントでゆらいでいる。この定義にとってのアノマリーの存在と反証可能性に、須藤自身がすでに論及しているのである。

したがって、この定義の問題点を具体的な現場の事実を照らして論じる必要はもはやないであろう。むしろ、興味深いのは、この定義のゆらぎに呼応すると捉えてよい、「まえがき」における須藤と遠藤の次の記述である。

観光がもつ極端な複雑性の縮減によって「観光地」の地底に埋められたもの、観光的な価値のないものとして、隠されたもの、捨てられたものの「ざわめき」を、もう少し明るみに出そうと思う（須藤・遠藤 2018b: 8）。

ここで彼らが言及する「複雑性の縮減」は、ルーマンのよく知られた定式化である（次章参照）。彼らによれば、観光システムは、観光資源にならないものを排除するというかたちで複雑性を縮減しつつ、観光資源をつくり出す。そこには、観光による観光文化の「誇張」や「ねつ造」——伝統の創造など——も含まれる。ただ、この観光資源の排除と包摂の基準自体をつくり出すのは観光システムそのものである。たとえばダークツーリズムは、明るい面を強調したがる観光の反対側にあるものだが、それは、こうした排除と包摂の複雑で自己言及的・自己産出的な特徴を如実に示すものである。いったん観光的に無価値とされた情報や人々の生活が、観光の舞台に復活し登場することが、自己言及的な観光システムの複雑性の縮減においては起こりうるのである（須藤・遠藤 2018b: 8-9）。私なりに若干補足すれば、観光システムは、いったん明るいものを主要な観光資源として自身をつくり上げたのだが、その選択と排除が次の段階におけるさらなる選択と排除を通じた自己の再組織化へと向かう中で、排除された暗いものさえ新たな資源として見出し観光資源の中に再組み込みをし、観光という自己産出的なシステムの豊かさに貢献するものとした、ということである。このように、彼らはルーマンの社会システム理論を参照しつつ、観光の概念の確定に向かうのとは逆の方向性を模索しようとしている。

また、当該共著の「おわりに」では、ジンメル「橋と扉」（ジンメル 1994 (1957/1909)）に触れつつ、観光

13 加太は当該論文で『観光者のまなざし』初版（アーリ 1995 (1990)）を参照しているが、これを改訂した第2版（Urry 2002）において、アーリは、グローバル化の中の観光についての章を新たに設けている。また、その後、アーリがラースンとの共著で刊行した『観光者のまなざし』第3版でも、現代観光の諸形態への目配りはいっそう強化されている（アーリ・ラースン 2014 (2011)）。アーリがエリオットと著した『モバイル・ライズ』は、観光論の枠組みを超えて、移動を常態とする人々の生を主題化しており（エリオット・アーリ 2016 (2010)）、アーリは、定住者に即して観光を捉える加太とは異なる議論方向性にその後向かっている。

14 ただし、その典拠として言及されるのは、UNWTOのホームページではなく、ブログである（<http://www.tugberkugurlu.com/archive/definintion-of-tourism-unwto-definition-of-tourism-what-is-tourism>）。

のボーダー（境界や越境）と両義性について論じている。観光はつねに両義性にさらされている現象である。ダークツーリズムの排除のあとの包摂が示すように、観光システムは、観光に当初は取り込まれなかったものをも貪欲に取り込んでいき、境界を変え、自己を増殖させる。相対主義、あるいは差異性や新規性は、自己産出する観光というシステムを考える上で重要である。こういった点が、この「おわりに」では確認される（須藤・遠藤 2018c: 237-241）。

このように、彼らは、観光について論じる議論から排除されてしまうものを包摂し論じていこうとする観点から、観光システムの自己生産性や複雑性について論じている。ただし、その主張を観光の定義に関する議論へと振り向けるならば、当該共著の序章における上記の定義をも含めて、特定の観光の定義によってはこぼれ落ちてしまう現場の事実をすくいあげる必要性を説いているということになる。あらためてこの序章の定義をみれば、これに当てはまらないアノマリーを挙げることは容易である。また、そもそも非日常経験と日常経験とが混合し流動的なものとなりつつあるのであれば、何らかの非日常性を含むのが観光であるとする定義にこだわる必然性もないことになる。こうして、序章における観光の定義は解体されるべきものであるということが、「まえがき」であらかじめ論じられ、「おわりに」で再確認されている、と受け取ることができる。

私は、序章にある観光の定義ではなく、この「まえがき」にある「ざわめき」を明るみに出そうとする視座、あるいは「おわりに」にある観光の両義性——つまり一意的には定義できない——への着目こそ、この共著における肝の部分であると考えている。こうした理解が正しいとすれば、須藤と遠藤の議論から汲み取るべきものは、「まえがき」や「おわりに」と序章の定義との間にある議論のずれや論理の不整合ではない。観光の複雑性・自己言及性・自己生産性を示しつつ観光の定義の脱構築をまさに実践しようとする、この姿勢にこそ着目すべきなのである。すなわち、彼らは、序章の定義にみられるような、観光の核心部分を客観的かつ明確に定義しなければならないという規範の拘束から半身を離れつつ、何らかの観光の定義によっては捨象されてしまうさまざまなマイナーな事実にあらためて目を向けようとしているのである。そして、その先にあるのは、観光の厳密な定義でも、そうした定義を脱構築する議論でもなく、それらとは異なるオル

タナティブな議論方向性の検討であるはずである。

## 5 小結

ここで、本章の議論のポイントを整理しておく。①橋本は、観光の核心部分を捕捉するために、観光を狭く定義する。「異郷において、よく知られているものを、ほんの少し、一時的な楽しみとして、売買すること」が観光なのである。観光は、その外部にある多様なジャンルから「ほんの少し」の楽しみを寄せ集めて成立する、ポストモダン的な現象である。②この定義は、さまざまな要素が介入して形成されている今日の観光現象を適切に捉えようとする「戦略」の上に成立しており、一般的で汎用的な定義というよりも「現場の事実」に紐づけされたものという性格をもっている。③この定義の独創性は、あれこれの観光の実体的要素ではなく、外部の要素の寄せ集めという関係構造に観光の本質的特徴を見て取る点にある。

④この定義は、形式論的なものであるがゆえに、アノマリーの存在の指摘にもとづく論駁にたいして強靱である。しかし、他方で、観光をゼロ記号の消費行為現象として規定するがゆえに、類似の形式的特徴をもった別の現象——全体的社会事実——から区別することは難しいという脆弱性を抱えてもいる。⑤橋本の定義は静態論的な構えの中にあるとあってよい。しかし、時代を貫いて観光を定義できるとする前提そのものを議論の俎上に載せ、観光現象のみならず観光の定義をも時代とともに変転していく動態論的な視点から捉え直す議論方向性が、追及されてもよい。⑥スミスや橋本のような客観主義的立場からは、観光をまずもって一般的に概念規定する作業が重視される。しかし、理解社会的・解釈人類学的な立場からは、観光をそれぞれの主体によって異なる意味をもつ重層的経験の束として理解し、具体的・個別的な観光現象をまずもって記述することが重視される。後者の議論においては、橋本が観光の周辺的な問題とみなすような諸要素が、その当事者の主観的意味に照らして観光の中核的な意味合いになる状況を、看取することもありうる。

⑦加太は、公共投資など観光以外の施策や実践と観光とを区別しようとする視点に立って観光を定義する。その定義は、「観光とは、近代市民社会の定住者が、一時的に離郷し、有償を前提として気軽に楽しむために、他郷の風物を見に行き短期間滞在をする現象に関わることどもの総体である」というものであり、観光

を3つの概念の相関関係と8つの命題ないし必要条件の組み合わせから成り立つ文化現象として理解するものである。⑧しかし、加太の定義では、8つの命題がいかにあるいはどの程度組み合わせれば「観光」なのかの基準が明示されていない。また、観光者が定住者に限定されており、現代観光の多様な諸形態が十分取り込まれていない、といった難点も抱えている。橋本とは対照的に、実体論の次元で観光の特徴を明示する定義のあり方が、アノマリーの存在を浮き彫りにするという結果をもたらしているのである。

⑨須藤と遠藤は、ルーマン理論を参照しつつ、共著の冒頭部分で、「観光的な価値のないものとして、隠されたもの、捨てられたものの「ざわめき」を、もう少し明るみに出そうと思う」と述べる。これは、当該共著の序章で示される観光の定義にも向けられたものと捉えることができる。彼らは、観光の定義の脱構築を、自身の議論にも向けているようである。とすれば、彼らの議論を受けてわれわれが向かうべきは、当該の序章にあるような観光の定義を再検討し脱構築する作業ではもはやなく、むしろこの「ざわめき」を明るみに出そうとする議論方向性のさらなる探究である。

前章から本章にかけて、スミス、橋本、加太、そして遠藤と須藤それぞれの観光の定義をめぐる議論を取り上げ、検討してきた。以上の議論から指摘できるのは、観光の厳密かつ一般性を確保できる定義、ヴィトゲンシュタインがいうような「すべての正しい記号言語が共有するもの」としての定義を見つけ出し確定することは、きわめて難しい、という点である。その最大の理由は、観光の「現場の事実」の多様性にある。常識的に観光に相当するとさしあたりみなされる諸現象を、ひと通り包含したかたちで定義を行おうとしても、何らかのアノマリーは存在する。しかも、観光現象においては時代の変化が急速かつおおきいという点もある。それゆえ、橋本や加太のように、現場の事実にある程度紐づけされた観光の定義はそれなりに有効である。しかし、それでも、アノマリーに相当するものはやはり存在する。橋本の定義の形式論的特徴について検討した際に触れたように、そもそも定義とは内実とともに外縁を示すべきものであるが、観光とそう

でないものとを分ける境界はきわめて茫漠としている。橋本の定義も加太の定義も、観光概念の内と外との明確な境を確定しきれていないのである。

ここまで、いくつかの定義の例の検討を通して、観光概念に厳密な定義を付与しようとしても、なかなかそのゴールにたどり着くことができないこと、そうした作業は脱構築のループに陥るのではないかということを確認してきた。すべての定義を検証したわけではもちろんないが、これが観光の定義をめぐる本稿の暫定的な結論である。付言すれば、近年の観光に関する外国語文献を一瞥すると、観光をまず定義し議論を進めるという議論スタイルを採用するものがあまりないという点も指摘できる。観光の定義なしでやっていくというスタイルは、むしろ一般的であるといってよい。これにたいして、日本の観光研究者は、比較的定義にこだわる傾向があるともいえるかもしれない<sup>15</sup>。

観光概念の定義はやはり困難である。ただし、先行研究は、観光の定義なしで観光に関する議論を紡いでいけるとする積極的な理由を示しているわけではない。では、そうした立場は、どのような観点から可とされるのだろうか。次に、それについて考察することにした。「観光」という概念を定義づける (define) ことが難しいのであれば、観光概念を先行研究のようなかたちで定義づけしない (undefine) ことを妥当ならしめる、広い意味での「理論」的根拠について、確認しておく必要がある。これが次章の課題である。

## V 観光概念を undefine する

### 1 定義をしない根拠の探究

観光概念を定義することなく、観光に関する議論を提示する研究はすくなくない。むしろ、それがいまや主流であるとするらいいかもしれない。その理由は、現象面に着目するならば、これまで論じてきたように、次の3点が挙げられる。①観光現象は文化的・社会的・経済的・宗教的など、さまざまな特徴をもった総合的現象であり、モースにならっていえば「全体的社会事実」である。②観光には多様な形態がある。レクリエーションや気晴らしを一義的な目的とするも

15 日本の研究者が観光の定義にこだわる背景には、日本語の「観光」と英語の *tourism* 等の語との含意のずれにたいする問題意識があると考えられる。たとえば、佐竹 (佐竹 2010) は、「ツーリズム」と、多様な意味の広がりをもつ日本語の「観光」とを同義語とみなすことは種々の混乱を招くことになり、両者を概念として区別すべきである、と論じる。ただし、そのずれは、日常言語としての語の意味の次元にあるものである。したがって、概念あるいは術語の次元において適切な概念設定ができるのであれば、ツーリズムと観光を同義語とみなす可能性はあると考えられることを、付言しておく。

のもあるが、ある種のまじめさを必要とするものや、実存的体験を追求するものまでである。③観光現象は、急速に変化する。とりわけ現代では、次々と新規の観光形態が生み出されている。このように、多面的であり、多様であり、時代によって変化する、観光現象の総体をひとつの定義の中に落とし込むことは、きわめて困難である。

しかしながら、それは、「現場の事実」の複雑性を縮減した抽象的・一般的で汎用性に富む定義を考案しがたいということであって、消極的な理由にはなるとしても、定義をしないうまま議論を進めること自体を正当化する積極的な理由にはなりえない。そもそも、観光を定義できないというのであれば、「観光」論を名乗ることをやめ、別の複数の概念とその定義をゆるやかに共有する基盤の上に立って、いったん観光論という枠組みを解体しつつ再総合する、学際的な研究体制の構築へと進む道筋もまたあるであろう。観光概念を定義できないと観光研究を名乗る立場に立って正面から堂々と述べることは、自らの拠って立つべき基盤を明示しない（できない）という自己矛盾に陥ることにもなりかねない。なお、私は、それもあって、観光論や観光人類学ではなく「観光の人類学」を標榜してきたのであるが（吉田 2013）。

さて、では、観光という概念の使用の妥当性を確保しながら、観光を定義しがたいという主張を正当化するような、広義の理論はあるのであろうか。私は、これについて、3つの立脚点があると考えている。それぞれについて論じていく。

## 2 規則の探究からゲームの探究へ

ひとつは、観光にかぎらず、概念の一意的な定義を放棄するという立場である。これは、序論で論じたそもそもの前提を覆す理論ないしパラダイムに立つということになる。

序論では、前期ヴィトゲンシュタインの代表作『論理哲学論考』に言及した。ヴィトゲンシュタインは、この著作をまとめた時点では、言語と事実との間の写像関係を想定し、定義によって「正しい記号言語」を一定範囲において確定しうる——また「語りえないものについては沈黙せねばならない」（ヴィトゲンシュタイン 2003 (1933/1918): 七）——とする確たる見通しをもっていた。別言すれば、彼はいくつかの整序された規則に命題や概念を還元しうるという立場に立って

いた。しかし、その後、ヴィトゲンシュタインは、こうした自身の考え方を「たいへんな間違い」であったとし、捨てた。後期ヴィトゲンシュタインの代表作である『哲学探究』では、透明で純粹で理想的な論理言語という考え方は棄却され、われわれが日々もちいる日常言語のあり方が主題化される。この日常的な言語活動は、「言語ゲーム」(Sprachspiel/ language-game)に帰するとされる。つまり、言語において存在するのはルールではなく、ゲームなのであって、言語活動とはただ言語の使用や実践に尽きるのである。その使用の中に埋め込まれたルール（文法など）を抽出することは可能である。しかし、ア priori にルールがあって、それにもとづく言語実践のゲームが事後にあるということでは決してない。むしろ、実践つまりは経験的事実こそがルールの基盤や原点なのである。そして、ヴィトゲンシュタインは、言語ゲームを、日常言語の特徴を表す概念としてのみならず、自らの哲学の方法でもあるとした。哲学的概念を形而上学的用法から日常的な用法の場へと連れ戻し、再検討すること、これが『哲学探究』の主題であった（ヴィトゲンシュタイン 2013 (2003/1953); 野矢 2013, 2022; cf. クリプキ 1985 (1983/1982); 大家 2006)。

ヴィトゲンシュタインはいう。「哲学にできることは結局、言語の実際の使い方を記述することだけ」であり「哲学はそれを基礎づけることもできない」（ヴィトゲンシュタイン 2013 (2003/1953): 96）。このように、『論理哲学論考』におけるような定義や命題の確定作業は、もはや学術的な意義をあまりもたない。観光論へと議論を移すならば、なすべき作業は観光を学術的な概念として定義することではなく、研究対象となる社会や人々の相互作用における、観光という語や概念の日常的な使用実践を記述し理解することである、ということになる。観光をめぐる言語ゲームは、当初のルールから外れていたり、別のルールに置き換わっていたりする。定義がいったん確定されたとしても——たとえば UNWTO によって——、それは永遠のものではない。概念をゆるぎないものとして定義しようとすることは、ナンセンスだといってもよい。日常生活における「実際の使い方を記述することだけ」をやればよいのである。

こうして、言語ゲーム論の立場に立つことによって、学術的な定義がなくてはならないとする先行研究の立場から決別しつつ、観光概念をもちいた研究を進めて

いくことはできる<sup>16</sup>。もっとも、この立場は哲学を立脚点としており、現象学的社会学やエスノメソロジーなどとは親和的であっても、これを従来のような人類学やその周辺諸学における実証主義的な観光研究と接続していくことは、決して容易ではない。また、定義づけを是とする既存の観光研究あるいは学問全体の主流かつ中心的な立場からみれば、あまりにラディカルな立場とみなされることも予想される。そもそも、言語哲学においても、後期ヴィトゲンシュタインの立場はあまりに前期と対照的であり、否定的に捉えられもした (cf. 野矢 2013: xi)。この立脚点から現場の事実即した観光論を再構築していく道筋を見通すことは、すくなくとも現段階においてはかなり難しいと判断せざるをえない。ただ、こうした認識を踏まえて、概念を定義することの学術的な意義と妥当性を根本から再考する反科学的考察には、十分な意味があるであろう。

### 3 解釈学的認識と観光の合理化の探究

いまひとつは、第IV章第2節で橋本の定義を再検討する中で触れた、理解社会的・解釈人類学的な視点から観光を記述的に理解しようとする立場である。この立場に立てば、議論の開始に当たってさしあたりの概念規定をすれば十分であり、むしろ必要なのは理念型を駆使して具体的な事実のあり方をしっかりと記述することである、ということになる。たとえば、クリフォード・ギアツは、こうした立場から人類学の主題を民族誌の「厚い記述」にあると明確に位置づけた (ギアツ 1987 (1973))。私自身は、これまで観光 (および宗教) の研究を、このようなギアツに近い、「解釈学的認識」と名づけた立場にもとづいて進めてきた (吉田 2005, 2013, 2016a, 2016b, 2020)。それについては拙論ですでに論じたので、ここでこの認識についてあらためて詳しく論じることは省略する。

ところで、こうした立場に立った観光論を構想する場合、考慮すべき重要な理念型として、ヴェーバーのいう「合理化」があると考えられる。ヴェーバーの「合理化」は、過程と構造の両面を表す理念型であり、こ

く簡単にいえば、ある社会事象が潜在的に宿す脱ローカルな契機の全面化であるといえる。ギデنزの表現をもちいれば、ローカルなものが「脱埋め込み」によってより一般性を獲得し、社会・民族・地域・時代の差異をこえて有用性が認められ適応され、またそれらの差異に応じて改編されていくことが、「合理化」の基本的な含意である。ただし、重要なのは、そうした形式論的な水準において概念規定しうる「合理化」が、事象的・具象的な水準においてどのような形態を取るのか、という点である。ヴェーバーは、『職業としての学問』において、呪術の園からの解放、予測可能性とそのことへの信頼、それを支える技術と学問の発展といった、知性化としての合理化について論じた一方、『宗教社会学論集』においては、アジアにおける呪術の徹底や、近代西洋における来世の予測可能性を遮断する宗教観など、反知性化としての合理化にも論及した (ヴェーバー 1971 (1947/1915-1919): 324-334, 337, 1972a (1920): 22, 1972b (1920): 81-82, 1972c (1922): 49, 1976 (1972/1922): 15, 35-39, 52-54, 331-337, 1980 (1919): 32-33, 1989 (1920): 49-50, 2009 (1921): 482-497; ギデنز 2000 (1993/1976); 柳父 2010: 42-45; 矢野 2003: 32-33, 67; 吉田 2016a, 2016b, 2020)。それらはおなじ「合理化」の異なる現出形態なのである。ヴェーバーは、さまざまな社会的領域ないしシステムがそれぞれの合理化の過程にあるとともに、複数の主体にとって意味あるそれぞれの合理性や合理化がいわばせめぎ合い、さまざまな歴史的経緯や因果連関から、ある合理化が突出し他の合理化を圧倒したり凌駕したりしつつ支配的となっていくと捉え、その歴史的諸事例を記述しようとしていたと考えられる。その場合、ある主体のまなざしから合理化と捉えられるものは、別のまなざしからは非合理化と捉えられることがある。そうした合理化の具体的な現出形態の複雑性と多様性こそ、ヴェーバーの合理化論から読み取るべきポイントである。

観光も、こうした合理化の過程の中にあるといつてよい。観光は、社会生活のさまざまな局面と結び合つて発展し拡大してきた。たとえば、当初19世紀半ば

16 人類学においては、過去にこのような道歩んだ研究領域があった。親族論である。「親族」は、まさに現場の理論の積み重ねから、概念としての厳密な定義をなしえないという結論が出たことによって、体系的な研究の構築に向かう議論が終焉を迎えた領域である。もっとも、「親族」概念は人類学研究においてなお使用されている。一方、「文化」概念も、厳密な定義づけは困難という結論が出ているといつてよいが、他に代替可能な概念がないこともあって、いまも広義と狭義の2つの意味で術語としてもちいられている (吉田 2007, 2022a (2018): 47-50, 103-111)。ただし、「文化」研究という表現は、もはや人類学や周辺諸学においてほとんど何の示差的内実も意味しないといつてよい。「観光」概念や「観光」研究は、今後この「親族」や「文化」に似た道歩んでいくのであろうと私は考えている。

に観光が一定の社会層の実践する活動となったころには、ホームから移動し、アウェイの地に一時的に滞在しつつ、もっぱら何かを「見る」ことが、観光の基本形態であったといえる。しかし、今日のエコツーリズムやメディカルツーリズムは、そうした「見る」ことではなく、体験や施術を主要な目的とした観光形態の例である。アグリツーリズムに参画する観光者は、消費よりもむしろ生産に従事する。ほかにも、漁業体験を中核としたブルーツーリズム、各種の遺産の鑑賞や体感を目的としたヘリテージツーリズム、さらには人類の負の遺産——広島原爆ドームや平和記念資料館、アウシュヴィッツ・ビルケナウなど——から学ぼうとするダークツーリズムなども、出現している（市野澤2016, 2021; 吉田 2021b）。また、観光地での一時的な滞在がかならずしも主目的とはいえない観光形態もある。たとえばクルーズ観光である（江口 2001）。クルーズ観光には、数日程度のものから半年以上にわたるものまでさまざまな形態があるが、下船して一時的に訪れる観光地での経験よりも、むしろこの移動する船中の体験自体が主たる目的となっている。この点で、クルーズ観光は、移動をできるだけ早く済ませるおおくの観光形態とは対照的な性格をもつ。さらに、居心地よさや利便性とは別の、その地でしか体験できない価値を重視する観光形態も存在する。船でしか行けない西表島や小笠原諸島におけるトレッキングを目的とした旅行、豪華なホテルのスイートルームでの一夜ではなく、極北の地において寝袋にくるまつのオーロラ見学を目的とする新婚旅行、などである。すでに触れたヴァーチャル観光——ホームからの移動という要素を欠く——も含め、これらの観光形態のおおくは、20世紀前半において広範な社会現象になってはいなかった。しかし、観光においては、それぞれの顧客の嗜好によって相当な差異をもってあらわれる精神的・文化的価値の比重が高く、ある価値観点からすれば合理的なものと非合理的なものがときに交差したり、優先順位が変わったりすることにもなる。とりわけ今日の肥大化した観光産業は、こうした顧客の多様な選択を予期した多様な商品を展開しており、その傾向にはますます拍車がかかっている。新たな展開の局面を押し広げていくことで、観光産業はさらに新たな顧客と目的地とを獲得し肥大化している。その諸形態の中には、およそ相反する意味合いや特徴をもったものがある。観光は、こうした多様でときに対照的な合理化の方向性を内包しつつ発展してきている。その過

程と構造の中には、ある種の「合理化のパラドクス」というべきものを看取することができる（吉田 2018, 2020）。

もともと観光は、その娯楽性や経済効果から国内外の社会において浸透・拡大したものではある。しかし、今後もそれが観光の中核的な意義として存続すると仮定するべきではなく、ましてやすべての観光形態が何らかの要素を共通にもつはずだと考える必要もない。さまざまな価値をそれぞれの観光形態がもちつつ、異なる方向性の合理化過程が並走したり絡み合ったりする中で、全体として肥大化していく観光の「合理化」の複雑で複合的な過程を記述的に理解していく作業、これが、観光の合理化の探究において必要な議論となる。

その場合、未来をも含めた観光の増殖（または衰退）の過程の全体を見渡すような総合的・包括的な定義を行うことは、論理的にいて不可能であろう。また、未来はさて置き、現時点において観光がおおむね増殖の過程にあるとすれば、ある時点において一般性・汎用性に富む観光の定義をたとえ提示できたとしても、それはすぐに色褪せたものになってしまうであろう。したがって、こうした理論・認識上の立場に立てば、観光を定義することよりも、可能な範囲での「厚い記述」を積み重ねていくことこそ、優先されるべき作業であるということになる。セルトー（セルトー 1987 (1980): 199–203) のいう、「見る者」の立場からの一望監視的な定義づけではなく、「歩く者」の立場からの一種のゲリラ戦法によって個別の事例をしっかりと把握していくこと、これが取り組むべき研究上の作業となるのであり、その先に観光をひとつの視野から統一的に捉えうるのかどうかはさしあたり括弧に括っておいてよい、ということになる。このような方法的・認識的な立場からは、第II章で今日の人類学の奇妙なあり方と述べたものも、かならずしも奇妙なものではないと判断されうるであろう。

#### 4 社会システムとしての観光

さて、もうひとつの立場は、こうした事象次元において出来事事実の記述を重視しないわけではないが、むしろその事実の複雑なあり方を抽象化し理論的に捕捉することをより重視する立場である。具体的にいえば、それは、遠藤と須藤も参照した、ルーマンの理論的枠組みに依拠した観光論の可能性を探究することである。現代のスーパー理論たるルーマンの社会シ

システム理論を観光論に援用しようとする試みは、第II章第2節でも触れたように、今後さらに検討されるべき有力な議論方向性である。

ルーマンの社会システム理論は、パーソンズの社会システム理論の修正を出発点とし、次々と新たな概念や理論武装を付加しながら更新されていったものである。抽象度が高いと同時に、博覧強記と独特の表現が相まっており、それが幾度かの理論や認識の新展開を経ているため、また単行本は72冊、論文その他は465点をこえる多作の人でもあるため、ルーマンの論じたある主題についてその基本的な論点を説明するだけでも優に本1冊分の記述が必要となり、またその種の研究書も数おおい (ex. クニール・ナセヒ 1995 (1993); 小松 2003; 高橋・小松・春日 2013; 田中・山名 (編) 2020a; 長岡 2006: 27, 42-43; 馬場 2001; バラルディ・コルシ・エスポジト 2013 (1997): 307-341; ボルフ 2014 (2011); 村中 1996; メラー 2018 (2012))。

管見のかぎり、ルーマン自身は観光については何も論じていない。したがって、ここではあくまで議論の粗い見通しを述べるにとどまる。ただ、ルーマンの諸論を踏まえるならば、観光を、自己生産的システム——彼がいうオートポイエシスのシステムを、ここではこのように表記する——として定義できるかどうか焦点となることは、明らかである。もっとも、それについて考察するためには、まずルーマンの社会システム理論の基本的なポイントを整理しておく必要がある。そこで、ごく圧縮したかたちでルーマン理論の概要を要約し、その上で、この理論的見地から観光を自己生産的システムとして定義する可能性について、若干の見通しを述べることにしたい。

\*

ルーマン理論の第1のポイントは偶有性 (Kontingen/contingency) である。偶有性とは、必然性の排除と不可能性の排除によって定義される可能様相論的概念である。リスク論の理論的基盤も、この偶有性つまりは潜在的な可能性への着目にある。ルーマンは、初期から一貫して、ある事態の出現が他でもありえる別の可能性——その事態が起きない可能性も含め——を背後に潜在的にもっているという観点に立って、社会秩序や社会現象を理論化しようとしてきた。必然性や因果関連ではなく、偶有性にもとづく社会の記述と把握、これがルーマン理論の基盤にある特徴である (ルーマン 1983c (1974), 1984 (1974), 1986 (1975), 1990 (1973/1968), 2014 (1991): 32-33, 2020 (1984): (上) 143-186; cf.

大澤 2019: 557-562; ギデンズ 1993 (1990): 45-53; バラルディ・コルシ・エスポジト 2013 (1997): 254-257; ボルフ 2014 (2011): 24-25; メラー 2018 (2012): 76-82)。

第2は、自己観察と自己言及性である。ルーマンは、観察という概念を人間に限定しない。たとえば、免疫系はウイルスという外から侵入した敵を観察 (発見) し、これに攻撃を加えるものと捉えられる。また、ある観察によってある区別がなされると同時に、この区別をする観察それ自体もメタレベルにおいて観察されることがある。すなわち、観察がより高次のものとなれば、オブジェクトレベルの観察(ファーストオーダーの観察) とともに、メタレベルの観察や観察している自己自身の観察という、観察の観察や自己観察といったセカンドオーダーの観察の契機が加わるのである。人間——正確には、その心ないし精神——は、観察し行為する自らを自己観察する。そして自らのふるまいを反省し、自らを変えていくこともできる。こうして、自己観察は自己自身のあり方に直接波及することになる。他によってではなく自己によって、メタレベルにあった自己観察がオブジェクトレベルへと反転し、自己観察それ自体が主題化され、なすべき行為へと接続されるのである。人間だけでなく社会や組織も、同様の自己観察を自己活動に接続する仕組みをもつ。自己を観察し、反省し、それを次の活動につなげていくことで、当の主体や組織は自ら回転していく。この自己観察を自己の改善や再組成へとつなげる自己言及性のメカニズムこそ、社会や人などの複雑な観察システムのもつ特徴である。なお、ベックやギデンズらは、これとほぼ同様の社会的メカニズムを再帰性という概念によって捉える (バラルディ・コルシ・エスポジト 2013 (1997): 42, 148-153; ベック・ギデンズ・ラッシュェ 1997 (1994); ボルフ 2014 (2011): 113-132; ルーマン 1996 (1990), 2020 (1984): (上) 99-102)。

第3は、「環境」と対になった「システム」の概念である。システムは、周囲の環境との間に複雑性の縮減の落差を有するという点において境界をつくり、システムとしての内的秩序と実体を構成する。たとえば、社会における信頼のメカニズムは、信頼できるものできないものを区別することで、環境の途方もない不確実性を縮減するものと捉えられる。ルーマンが挙げる例ではないが、クレジットカード決済の制度は、人と人との相互行為の次元における金銭支払いとは別の次元に形成された信頼のメカニズムの発展的形態のひとつである。この制度の例が示すように、いったん

複雑性を縮減し形成されたシステムは、そのシステム内部において複雑性を増大させるメカニズムを独自に発展させていく。こうして、高度な複雑性を内部に有するシステムは、より多様で複雑な環境に対応できるようになる（大澤 2019: 544-554; ルーマン 1990 (1973/1968), 2020 (1984): (上) 33-35)。

ルーマンは、システムの中でも自己組織的・自己観察的・自己言及的なシステムに焦点を当てる。ある段階から、ルーマンはこの種のシステムを自己生産的システムと呼ぶようになった。自己生産的システムは、システムの秩序とともにその構成要素などすべてを自ら生成する。この概念を提唱したマトゥラーナとヴァレラは、自己生産的システムを生命体に限定していた。しかし、ルーマンはこれを拡大解釈し、①生命システム、②心的システム、③社会システム、の3つを自己生産的システムとみなす（マトゥラーナ・ヴァレラ 1991 (1980); ルーマン 2020 (1984): (上) 13-17)。付言すれば、おそらく、宇宙もひとつのあるいは究極的な自己生産的システムであると考えられることはできる。①の生命体は、新たな細胞を自己生産し個体としての存続をはかるとともに、次世代の再生産をも行う。②の心的システムと③の社会システムが、自己観察的かつ自己言及的なシステムであることは上に述べたが、加えて意味構成的なシステムであるという点で、②③は①と区別される特徴をもつ。ただし、②と③の間には違いもある。②は意味から成り立つ思考や感情を構成要素とし、それが次々とつながり作動することで存続するのにたいして、③は意味から成り立つコミュニケーションを構成要素とし、このコミュニケーションが次々とつながり作動することで存続するシステムなのである。重要なのは、社会というシステムの構成要素は人ではなく、また意識や思考でもなく、コミュニケーションである、という点である。これが第4点である。この点は、ルーマンとハーバーマスの間にある決定的な認識の差異でもある。ルーマンは「人間はコミュニケーションできない。コミュニケーションだけがコミュニケーションできる」と端的に指摘する（ルーマン 2009b (1990): 19)。自己生産的システムという観点に立てば、

このことは当然であろう。このように、ルーマンは、社会システムと心的システムとを区別し、両者の関係に注目しつつ、コミュニケーションを構成要素とした社会システムを記述しようとする（大澤 2019: 530-552; 河本 1995, 2000; クニール・ナセヒ 1995 (1993); ハーバーマス/ルーマン 1984+1987 (1971); バラルディ・コルシ・エスポジト 2013 (1997): 42-45; ルーマン 2020 (1984))。

ここでいうコミュニケーションは、言語活動に限定されるものではなく、たとえば経済における支払いなどをも含む、抽象的な概念である。社会の諸システムは、それぞれ独自のメディア——経済の場合は貨幣であり、科学の場合は真理である——を媒体としたコミュニケーションのスタイルをもつ<sup>17</sup>。重要なのは、そうしたコミュニケーションの連鎖の中にこそ、自己生産的システムが存在している、という点である。コミュニケーションは、現れてはすぐに消滅し、そして後続のコミュニケーションに置き換えられていく。コミュニケーションが不断に再生産されるというこの過程そのものにおいて、社会システムは存立しているのである——付言すれば、コミュニケーションの接続においては、ずれ（デリダのいう差延）や接続不良が必然的に伴うとともに、そもそも接続されないという可能性もある——。この、過程に即したシステム概念が、第5点である。したがって、システムを、それが有する何らかの共時的な構造の中に見出そうとする視座は、自己生産的システム理論と相容れない。システムが構造なしに存立しようということでは、もちろんない。システムは何らかの構造を形成する。しかし、ルーマンの社会システム理論においては、構造が理論の中核的な位置づけをもつことはありえないのである（クニール・ナセヒ 1995 (1993): 107-108; ルーマン 2020 (1984): (下) 33; cf. 東 1998; 高橋哲 2015 (1998))。

第6点は、システムの機能分化をめぐるものである。社会システムは、3つの段階を経て進化してきたとルーマンは考える。第1段階は「環節的システム」、つまり人類学でいう分節的なシステムである。第2段階は「成層的システム」であり、支配者と被支配者と

17 あるコミュニケーションが理解され、遠くまで到達し、相手に拒否されず受け入れられるかどうかは偶有的である。コミュニケーションのこの非蓋然性（ありそうもなさ）を縮減し、蓋然性に変換するのがコミュニケーションメディアである。言語に加え、2種類のメディアがあるとルーマンは論じる。ひとつは到達の蓋然性を高める「流布メディア」であり、マスメディア・電子メディアや輸送体制などである。いまひとつは、たとえ不愉快であっても相手を受け入れるチャンスを高める「象徴的に一般化されたコミュニケーションメディア」であり、貨幣・権力・真理・愛などである（赤堀 2021: 155-156; ルーマン 1996 (1990): 50-63, 2009a (1990): 222-228)。

が垂直的に分化したシステムである。近代社会は、第3段階の機能分化システムである。たとえば、政治を担うシステムと、経済を担うシステムとは、それぞれ機能的に特化したシステムとしてたがいに自律した関係にある。いくら政治が経済に関与しようとしても、そこには限界がある。逆もまたしかりである。おなじく、科学という真理の探究を担うシステムは、政治や経済や宗教といった別のシステムからの干渉にたいして一定の独立性ないし自律性をもつ。また、それぞれが異なるシステムであるからこそ、たがいに密接に関連し合うこともできる。たとえば、裁判においては、医学の専門家や教育の専門家らがその専門領域の立場から情報を提供し、法の裁きの執行というコミュニケーションの連鎖を支える。ルーマンは、こうした異なるシステムの間相互依存関係を、相互浸透や構造的カップリングと呼ぶ。心的システムと社会システムも、構造的にカップリングしている。社会の中のそれぞれのシステムが独自のコミュニケーションの連鎖を生産していき、そうした異なる種類のコミュニケーションが相互に行きかい相互浸透する中で、社会全体がいつその複雑性をもつとともに、高度な複雑性の縮減をなしうるのである（大澤 2019: 555-557; クニール・ナセヒ 1995 (1993): 73, 83-84, 155-166）。

社会学的研究は、こうした機能分化した社会の中の各システムの特徴とそれらの間の相互浸透を観察し記述するものとなる。こうして、ルーマンは、それぞれのシステムについての著述を積み上げていった。『社会の経済』『社会の社会』『社会の科学』『社会の法』『社会の芸術』などである。また、1998年のルーマン死後に遺稿を編集し出版されたものとして『社会の教育システム』『社会の宗教』『社会の政治』『社会の道徳』がある（ルーマン 1991 (1988), 2003 (1993), 2004 (2002), 2009a (1990), 2009b (1990), 2012 (1995), 2013 (2000), 2015 (2008), 2016 (2000))。「社会の社会」という表現には違和感ももたれるかもしれないが、「社会」というシステムは「経済」「政治」「芸術」などのシステムと相互浸透するひとつの機能分化したシステムとして観察し記述しようという点を、強調する意図があるものと思われる（Luhmann 2020 (1984): (下) 193）。現代社会は、これらの機能分化した諸システムが相互に関連し合う中にある。そのどれが中心であるとか頂点であるとかいったことはなく、それらはある観察における相対的な区別しかもたないものとして作動し、相互に円環的で、いわば自己準拠しつつ他者準拠もするよ

うな絡み合いの中にある。これが第7点である。

\*

では、以上を踏まえて、ルーマン理論を観光論へと媒介する見通しについて述べることにしたい。ルーマンの一連の著作のように、「社会の観光」について論じることは可能であろうか。

ポイントを整理しよう。①観光は、偶有性の観点から考察されるべきところがある。ある観光者やホストが観光関連行為を実践するか否か、どのような観光行為の実践を選択するか、ある観光地社会がいかなる観光地となるのか、観光地として発展するのか衰退するのかなど、観光現象は偶有性の観点から再理解されるべき点が多々ある。従来の観光研究は、観光の成功例や発展可能性をおもに取り上げ論じてきたが、失敗例や衰退可能性を含めた観光現象の理解が必要である（cf. 吉田 2013, 2020）。②ゲスト側も、ホスト側も、両者を媒介するミドルマン的主体（通訳、ガイド、旅行会社や運輸会社などの事業体）も、観光地社会も、自己観察・自己組織化・自己言及性のメカニズムを有する。観光は、再帰的近代における社会現象である。③観光は、前章第4節でも触れたように、複雑性を縮減し形成されるとともに、そのシステム内部において複雑性を増大させるメカニズムを発展させている。④この②の一部にあらためて論及することになるが、観光は、コミュニケーションを構成要素とした自己生産的なシステム（ないしその部分システム）とみなすことができる。たとえば、口コミ、ウェブ上の評価、雑誌やテレビなどのメディアを介した情報によって、支払いという経済的コミュニケーションによって、政策的介入や専門家の分析・助言などによって、ある観光地における、あるいはインターローカルまたはグローバルな、観光現象の興隆や停滞・低落を引き起こされる。⑤そうしたコミュニケーションの連鎖の中こそ、観光という社会現象が存立していると考えられる。過程に即したシステム概念を観光に適用することは、前章第2節で論じた動態論的視点の組み込みという点に照らしても、有益な選択肢となる。⑥従来の研究は、観光が政治でもあり、経済でもあるといったかたちで、総合的現象として、あるいは部分からなる全体的社会事実に相当するものとして、観光を捉えようとしてきた。しかし、観光は、政治や経済や宗教などとの間で機能分化したシステムであると捉える方が、その特性をよりよく記述できるように思われる。たとえば、経済は観光において重要な契機であるが、それ

に観光を還元しきれわけではない。観光システムは、他のシステムにたいして一定の独立性ないし自律性をもっている。観光という社会現象と、観光研究という科学のサブシステムとの関係も同様である<sup>18</sup>。それらは、たがいに自律したシステムであるからこそ、密接に連関し合うことにもなる。観光の特徴は、そうした構造的カップリングの観点から再理解されうる。⑦観光は、現代社会の中心にあるシステムではない。そもそもそうした中心的システムがないと仮定するのが、機能分化した現代社会を記述するルーマンの理解のあり方である。

ラフなスケッチではあるが、以上の点から、「社会の観光」について論じる可能性はそれなりに有望であるように思われる。ただし、ここでひとつ留意すべき点がある。それは、経済や科学のように、観光に固有のメディアがあるとは考えられない、という点である。この点を重視するならば、観光を機能分化したひとつのシステムと直ちにみなすことはできず、それ自体は複合的なシステムであったり、「社会の社会」の部分システムであったりする理論的可能性を視野に入れた、慎重な検討が必要であるということになる。ただ、観光によく似た形式的特徴をもつ社会システムもある。教育である。ルーマンは、「コード化とプログラム化」論文や『社会システム』において、教育システムを特定的一般化されたコミュニケーションメディアと結びついていない、やや特殊なタイプのシステムと位置づける。教育システムに関わるメディアをめぐるルーマンの議論にはややゆらぎがあるが<sup>19</sup> (石戸 2000: 28-29, 62-63; 高橋聡 2020: 195-199; 田中・山名 2020b: 10-17; ルーマン 2020 (1984): (下) 257-258; Luhmann 1987: 185; Luhmann & Schorr 1988 (1979))、教育システムに関する考察を参照し、このメディアに関する論点

を整理しつつ、観光を——ひとつの／複合的な／部分的な——自己生産的システムとして理解する議論可能性は十分あるように思われる。こうして、ルーマン理論を基盤とし、観光の独自の特徴とさまざまな機能分化したシステムとの構造的カップリングのあり方を、具体的に詳細な現場の事実即したかたちで、かつ抽象的な理論武装をまとわせつつ、記述すること、これは、まだ試みられてはいない、きわめて複雑な作業となるであろうが、観光論が今後検討すべきひとつの方向性である。

そして、こうしたルーマン理論を立脚点とする立場に立てば、観光概念についてしっかりと理論的に記述するには、本1冊かそれ以上に相当する分量の議論が必要になることはほぼ確実であろう。したがって、第2の解釈学的な議論可能性とは異なり、そもそも短い命題のかたちに観光の定義を圧縮すべきではない——そのような単純化した議論は、観光システムの複雑性の社会学的な縮減のあり方としては適切ではない——という理由によって、先行研究のような観光の定義に向かう方向性は否定されることになる。ただし、逆に、この先行研究のような立場からすれば、ルーマン理論の立場は、第1の言語ゲーム論とはまた異なる方向性においてあまりにパラダイムが異なりすぎているために、通常定義を是とするパラダイムから外れた議論であると評価されることになるのであろう。ただ、観光論をルーマンの社会システム論のパラダイムから抜本的に捉え直そうとすることが、第3の有効な可能性としてあることは、間違いないと思われる。

ところで、この方向性で観光論を再構築するのであれば、私はルーマン理論を若干補正することが考慮されてよいと考える。以下、その見通しに触れておきたい。

18 観光研究の質量の増大と、観光現象の質量の増大とは、単純な正のフィードバックではないとしても、一定の相関関係をもつであろう。「社会の観光」について論じる作業を積み重ねていくこと自体、社会の中に埋め込まれた社会現象であって、それが研究対象たる観光現象のあり方に影響をおよぼし、「社会の観光」の出来ないし実体化に与るかもしれない、ということ踏まえた観光研究が必要である (cf. 吉田 2013: 20-25)。

19 「コード化とプログラム化」論文や『社会システム』を書いた1980年代の時点で、ルーマンは、教育システム固有のメディアが見つからない、あるいは発達していない、としていた (固有のコードはあるとしていたが、議論が複雑になるので省略する)。しかし、1991年の「教育のメディアとしての子ども」論文では、人間形成と社会的選抜を包括する教育システムのメディアは「子ども」という概念であると論じるにいたった。その後、教育システムを子どものみならず大人をも対象とする「人間形成システム」として拡大解釈し、この人間形成を担う教育システムのメディアは「ライフコース」である、ただし学校など狭義的教育システムにおけるメディアは子どもである、と論じるようになった (高橋聡 2020: 195-199; 田中・山名 2020b: 10-17; ルーマン 1995 (1991), 2020 (1984): (下) 257-258; Luhmann 1987: 185)。このように、ルーマンの教育システムをめぐる考察は変容している。また、その教育システム論が、ショールとの共同研究の色合いが濃いという点にも目配りしておく必要がある。ここでは、さしあたり、教育システムのコミュニケーションのあり方は、特定の固有のメディアにかかわらずしも縮減されない複雑性や多様性を内包するものと理解しておくが、この点についてさらに論点を明確にすることは今後の課題のひとつである。

実は、オートポイエーシス概念によって社会システム理論を再彫琢する以前、初期のルーマンは、パーソナルの社会システム理論を踏まえて、社会システムを行為システムとして定式化していた。また、コミュニケーションとその接続という観点から社会システムを再定式化したあとでも、コミュニケーションの中に主体の行為の契機が不可欠に介在していることを指摘していた。コミュニケーションには、情報を伝達する行為と情報を理解する行為が、また情報を伝達する主体とこれを受け取り理解する主体が、介在せざるをえないからである。また、上でも触れたように、コミュニケーションそれ自体は、泡のようにはかなく消え去っていくものである。「コミュニケーションは直接には観察できず、推測されるしかない。……コミュニケーション・システムは、観察されうするためには、あるいは自分自身を観察しうするためには、行為システムとしての旗を掲げねばならない」(ルーマン 2020 (1984): (上) 223)。コミュニケーションをある人格の伝達行為に縮減することが、コミュニケーションの自己観察として行われている、とルーマンは考える。つまり、人の伝達行為というかたちにコミュニケーションの本質が自己単純化されることによって、社会の中のコミュニケーションが円滑に進行し、またその伝達を確認できるような仕組みが、この現実存在する社会システムには備わっている、ということである。クニールとナセヒは、こうしたルーマンの理論的枠組みの機微について、社会システムを行為の連鎖として捉えることが正しくないわけではない、しかしそれは理論的には一面的なものである、と指摘している(クニール・ナセヒ 1995 (1993): 76, 101-107; ルーマン 2020 (1984): (上) 221-235)。

私は、こうしたクニールとナセヒの議論を踏まえつつも、あえてルーマンの社会システム理論からやや逸脱した定式化をすることが、観光論とルーマン理論を

接続する上では合理的な選択になりうるのではないかと考える。すなわち、観光を、コミュニケーションではなく、行為の連鎖から成り立つものとして「単純化」して捉えるのである。それによって、社会を行為や理解の連鎖から捉えようとしたヴェーバーの議論との接続も容易になる。人や組織による情報伝達行為と情報授受行為ないし理解という行為の連続の契機から社会が成り立っているとすると、われわれの社会システムの自己描写にあえて乗ることによって、観光に関する考察をいささか単純化し縮減して進めていくこと、これは、進化したルーマン理論をいわばプロトタイプに差し戻すことにもなるが、それがルーマン理論の別様の可能性の地平を切り開く方途にもなりうるのではないかと考える<sup>20</sup>。また、それは、ルーマンとヴェーバーという20世紀の前半と後半において提示された「大きな理論」の接合可能性を探究するという、きわめてスリリングな研究へとつながっていくことになるであろう。

## 5 社会の観光の人類学へ

以上、先行研究にあるような観光の定義に与しない、観光論のオルタナティブな可能性について、①ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論を参照しつつ、定義することの限界を見定める哲学的な認識、②ヴェーバーの合理化論を参照しつつ、観光の多様な合理化のあり方を「厚い記述」によって把握する理解社会学的・解釈人類学的アプローチ、③ルーマン理論を参照しつつ、観光を自己生産的システムとして理論的に記述する社会システム理論的アプローチ、の3つの方向性について論じてきた。私は、この3つを可能な範囲で総合しつつ、観光論のパラダイム転換をはかっていくことが今後重要になると考えている。その場合、3つの立場とも、記述を重視していることを、あらためてここで確認しておきたい。いずれの立場であれ、まずもって

<sup>20</sup> では、観光はどのような行為の連鎖から成り立つものなのか。教育が教える側と教えられる側との非対称の関係におけるコミュニケーションを基盤とする点に着目すれば、観光という行為は、自らにとっての外部＝環境において広い意味での審美性に関わる新たな体験や知見を得ようともとめるゲストと、そうした体験や知見を提供しつつゲストを迎えるホストという、異なるタイプの主体の間の非対称的な相互作用におけるコミュニケーションから成り立つものと、さしあたり定式化できるであろう。しかし、他方で、教育が「子ども」というブラックボックスをメディアとする点に着目すれば、観光という行為は、広い意味での審美性に関わる新たな体験や知見をもとめるゲストつまり観光者というブラックボックスたる意味の統一に即して、より抽象的な形式において理解されるべきものとなるであろう (cf. ルーマン 1995 (1991))。私は、後者の視点を突き詰める議論方向性に、ルーマン理論ならではの理論的可能性を感じる。また、芸術は作品というモノから審美的体験・知見・鑑賞を得る行為から成り立つが、観光は、モノばかりではなくコト——そして自己や自社会とその環境たる世界全体——からも審美的体験・知見・鑑賞を得る行為であるとともに、そこに移動、宿泊、飲食、そして支払い(経済)、学習など、さまざまな社会的行為／コミュニケーションとの多面的・複合的な構造的カップリングが伴うものである、とも考えられる。以上がさしあたる見通しである。

重要とされるのは事実の記述なのであって、この点において3者がある程度融合した何らかのパラダイムを模索することは可能ではないかと考える。中でも、とりわけ②と③の融合により、「社会の観光の人類学」——人類学の合意については第II章に述べたとおりである——の可能性を探究する方向性が有望ではないか、と思っている。ただ、いま私のもっている見通しは、ここに論じたことに尽きる。

## VI 結論 観光の周縁の探究へ

序論では、スミスのアンビヴァレントなスタンスと彼女の定義を紹介することから議論をはじめた。観光の定義の突き詰めた検討は、脱構築のループに向かうことが予想された。しかし、観光の定義なしで観光に関する議論を紡いでいこうとする先行研究の立場は、その妥当性の根拠を議論してはいなかった。そこで、本稿は、第II章において議論の前提となる枠組みの設定をしたのち、第三章と第四章において、人類学を中心とした観光のいくつかの定義——そのあるものは「大きな理論」に相当し、あるものは「現場の理論」つまり「中範囲の理論」に相当するものであった——についての検討を重ね、そうした定義が何がしかの難点を抱えていること、つまりは観光の汎用的な定義を確定することが困難であること、を確認した。そして、第V章において、先行研究のような「観光」の定義づけを目指すのとは異なる立場から観光研究を蓄積させることを可能ならしめると思われる3つの立脚点について論じた。望まれるのは、その3つの立脚点を踏まえたかたちで、観光論のパラダイムを組み替えていくことである。本稿の議論は、しかしながら、その見通しを述べるまでにとどまった。

あらためて振り返れば、観光に相当する社会現象は、トーマス・クックの活躍した19世紀後半以降、社会の中で一定の位置づけを獲得していった。以来、観光は、20世紀前半における植民地支配と列強による世界分割、科学技術の発展、消費社会化、世界恐慌後におけるレジャー産業の発見、などの諸契機によって、世界の諸地域の人々を広範に巻き込むようになり、20世紀後半に中間層のおおきをその顧客に取り込んでさらに大衆化していった。そこには、国際協調体制下でのいわゆる第三世界におけるインフラ整備によって、観光がさらに国内外の隅々に浸透していく過程も伴っていた(吉田2020)。

観光現象の拡大を後追いするように、観光の学術研究もはじまった。その発端は、世界恐慌後の1930年代にさかのぼる。岡本によれば、国際観光の「見えざる輸出」の重要性に注目した経済学者が、観光の経済的効果を測定するという観点から、観光を研究対象としたのであった。つまり、観光は、事前に獲得した収入を一時的に訪れた他国の観光地において消費するものとして捉えられたのである。この捉え方は、その後の観光研究や観光政策の中に引き継がれ、観光が経済や産業そして政策と結びつく局面がもつぱら主題化されていった。20世紀前半当時、観光はかならずしも重要な研究対象とはなりえなかったが、第二次世界大戦後、観光概念の浸透や急速な観光の発展といった事実を受けて、観光研究は本格化し、諸学問分野を巻き込んで発展していった。そこでも、主流となった主題は、社会・経済の発展や侵入れの手段としての観光産業ないし観光事業であった(岡本2001: 3-4, 21-22; 須藤2018b: 65; 廣重1965, 2002+2003(1973); 堀川2003: 6-7; 安村2001: 25-37; 吉田2013; Cohen2005a(1996/1984): 51)。

このように、観光という社会現象が西欧に成立してから、グローバルな拡大・浸透を経た今日までの歴史は、およそ150年と考えるとよい。観光を学術的な対象とした研究が成立し発展するようになってからは、まだ100年にも満たないが、この150年の観光の歴史的变化と地域ごとの偏差を跡づけたり記述したりした研究は一定の蓄積をもつにいたっている。そうした過去から現在までの観光の動向を一瞥すれば、観光の実態がおおきく変わってきたことにあらためて気づく。とすれば、それを受けて、観光概念が今日の観光諸現象を適切に捉えうる枠組みになっているかどうかをあらためて検証し、これを更新していく作業が必要になる。ただし、本稿の議論は、観光の精確な定義を目指す方向性とは異なる、オルタナティブな議論方向性に向けた論点整理を行うものとなった。その方向性を具体的に明確化し、パラダイムを組み替えていくことは、今後に残されたおおきな課題である。ただ、ひとつ明らかかなことは、概念の定義よりも事実の記述こそ、さしあたり重視されるべき作業と考えられる、という点である。これこそ、本稿がたどり着いた明確な結論である。

先行研究は、観光の核心部分を定義によって明確化することを試みてきた。それは、むろんひとつの議論方向性ではある。しかし、そうした観光の核心部分が

存在し、それを把握しうる／すべきであるとする視点自体は、ひとつのパラダイムにすぎない。私は、中心ではなく、橋本のいう「周辺の問題」、つまりは周縁的観光現象を記述し、今日の観光現象の幅広いあり方にあらためて光を当てることによって、観光研究のオルタナティブなパラダイムを探究する手掛かりが得られるのではないかと考える。そもそも、観光現象はかならずしも明確な輪郭をもって他の社会現象と区別しきれものではない。観光者とその外部、ホストとその外部、観光地とその外部とを分かちものも、考えてみればやはりあいまいで、うつろいやすいものではないだろうか。とすれば、観光の中心ではなく、そのあいまいな外との境界や、さらにその境界の外縁にまで視線を向けることによって、観光のもつ特徴をあらためて個別攻撃的に明確にすることができるかもしれない。観光における周縁的なものを記述することから、定義の精緻化とは異なる観光研究のオルタナティブを探究すること、これが、今後向かうべき観光論のひとつの具体的な方途となる。ここまでを示したことで、本稿の議論を閉じることにしたい。

### 附記

本研究は、JSPS 科研費 19K12593 および 2022 年度南山大学 パッヘ研究奨励金 I-A-2 の助成にもとづく研究成果の一部である。

### 参考文献

(日本語文献)

赤堀 三郎

- 2021 『社会学的システム理論の軌跡——ソシオサイバネティクスとニクラス・ルーマン』春風社。

アガンベン、ジョルジョ

- 2001 『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』上村忠男・廣石正和(訳)、月曜社 (Agamben, Giorgio 1998 *Quel che resta di Auschwitz. L'archivio e il testimone*. Bollati Boringhieri)。  
2003 『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』高桑和巳(訳)、以文社 (Agamben, Giorgio 1995 *Homo sacer*. Giulio Einaudi Editore.)。

東 浩紀

- 1998 『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』新潮社。

新 睦人

- 2004 『社会学の方法』有斐閣。

アドルノ、テオドール・W.

- 1996 『否定弁証法』木田元他(訳)、作品社 (Adorno, Theodor L. 1966 *Negative Dialektik*. Suhrkamp

Verlag.)。

阿部 彩

- 2002 「貧困から社会的排除へ——指標の開発と現状」『海外社会保障研究』141: 67-80、国立社会保障・人口問題研究所。(http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/DATA/pdf/16360907.pdf) (最終閲覧日 2022 年 12 月 23 日)  
2004 「補論「最低限の生活水準」に関する社会的評価」『季刊社会保障研究』39(4): 403-414、国立社会保障・人口問題研究所。  
2008 『子どもの貧困——日本の不公平を考える』岩波書店。  
2011 『弱者の居場所がない社会——貧困・格差と社会的包摂』講談社。

綾部 恒雄(編)

- 1984 『文化人類学15の理論』中央公論社。  
2006 『文化人類学20の理論』弘文堂。

アーリ、ジョン

- 1995 『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦(訳)、法政大学出版局 (Urry, John 1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. Sage Publications.)。

アーリ、ジョン・ラースン、ヨナス

- 2014 『観光のまなざし〔増補改訂版〕』加太宏邦(訳)、法政大学出版局 (Urry, John & Jonas Larsen 2011 *The Tourist Gaze 3.0*. Sage Publications.)。

池田 光穂

- 1992 「想像力観光への招待——フィクショナル・ツーリズムと〈他者〉理解」『中央公論』107(10): 314-320。  
1997 「虚構観光」『観光学辞典』長谷政弘(編)、pp. 10、同文館出版。

石戸 教嗣

- 2000 『ルーマンの教育システム論』恒星社厚生閣。

石野 隆美

- 2017 「「ホスト／ゲスト」論の批判的再検討」『立教観光学研究紀要』19: 47-54。

市野澤 潤平

- 2014 「危険だけれども絶対安心——ダイビング産業における事故リスクの資源化」『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』東賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田卓(編)、pp. 132-156、世界思想社。

- 2016 「楽しみのダークネス——災害記念施設の事例から考察するダークツーリズムの魅力と観光経験」『立命館大学人文科学研究紀要』110: 23-60。

- 2021 「ダークツーリズムの複雑さ——メディアが作り出す、メディアを見る観光」『モノとメディアの人類学』藤野陽平・奈良雅史・近藤社秋(編)、pp. 95-108、ナカニシヤ出版。

ヴァイトゲンシュタイン、ルートヴィヒ

- 2003 『論理哲学論考』野矢茂樹(訳)、岩波書店 (Wittgenstein, Ludwig 1933/1918 *Tractatus Logico-philosophicus*.)。
- 2013 『哲学探究』丘沢静也(訳)、岩波書店 (Wittgenstein, Ludwig 2003/1953 *Philosophische Untersuchungen*.)。

ヴェーバー、マックス

- 1971 「儒教と道教」『儒教と道教』木全徳雄(訳)、pp. 2-413、創文社 (Weber, Max 1947/1915-1919 *Konfuzianismus und Taoismus*. In *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie Bd. 1*, pp. 276-536. J. C. B. Mohr.)。
- 1972a 「宗教社会学論集 序言」『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敬三(訳)、pp. 3-29、みすず書房 (Weber, Max 1920 *Vorbemerkung*. In *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie Bd. 1*, pp. 1-16. J. C. B. Mohr.)。
- 1972b 「世界宗教の経済倫理 序論」『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敬三(訳)、pp. 31-96、みすず書房 (Weber, Max 1920 *Einleitung*. In *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie Bd. 1*, pp. 237-275. J. C. B. Mohr.)。
- 1972c 『社会学の根本概念』清水幾多郎(訳)、岩波書店 (Weber, Max 1922 *Soziologische Grundbegriffe*. In *Wirtschaft und Gesellschaft*, pp. 1-30. J. C. B. Mohr.)。
- 1976 『宗教社会学』武藤一雄・蘭田宗人・蘭田担(訳)、創文社 (Weber, Max 1972/1922 *Religionssoziologie*. In *Wirtschaft und Gesellschaft*, pp. 227-363.)。
- 1980 『職業としての学問』尾高邦雄(訳)、岩波書店 (Weber, Max 1919 *Wissenschaft als Beruf*. Duncker & Humblot.)。
- 1989 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄(訳)、岩波書店 (Weber, Max 1920 *Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus*. In *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie Bd. 1*, pp. 17-206. J. C. B. Mohr.)。
- 2009 『ヒンドゥー教と仏教——宗教社会学論集II』古在由重(訳)、大月書店 (Weber, Max 1921 *Hinduismus und Buddhismus*. In *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie Bd. 2*. J. C. B. Mohr.)。

植村 邦彦

- 2019 『隠された奴隷制』集英社。

江口 信清

- 1998 『観光と権力——カリブ海地域社会の観光現象』多賀出版。
- 2001 「クルーズ船観光の人類学に向けて——島国ドミニカとクルーズ船観光の関係を例に」『民族学研究』66(1): 106-121。
- 2011 「観光の文化人類学的研究」『観光研究レファレンスデータベース 日本編』江口信清・藤巻正巳(編)、pp. 62-70、ナカニシヤ出版。

江口 信清・藤巻 正巳(編)

- 2010 『貧困の超克とツーリズム』明石書店。

遠藤 英樹

- 2006 「観光する「主体」の形成——構成される観光経験」『観光社会文化論講義』安村克己・遠藤英樹・寺岡伸悟(編)、pp. 19-28、くんぷる。

エリオット、アンソニー・アーリ、ジョン

- 2016 『モバイル・ライブズ——「移動」が社会を変える』遠藤英樹他(訳)、ミネルヴァ書房 (Elliott, Anthony & Urry, John 2010 *Mobile Lives*. Routledge.)。

大橋 昭一

- 2013 「観光学のあり方を求めて——現状と展望」『観光学評論』1(1): 5-17。

岡本 伸之

- 2001 「観光と観光学」『観光学入門——ポスト・マス・ツーリズムの観光学』岡本伸之(編)、pp.1-28、有斐閣。

大澤 真幸

- 2019 『社会学史』講談社。

大屋 雄裕

- 2006 『法解釈の言語哲学——クリプキから根元的規約主義へ』勁草書房。

カイヨワ、ロジェ

- 1990 『遊びと人間』多田道太郎・塚崎幹夫(訳)、講談社 (Caillois, Roger 1967/1958 *Les Jeux et les Hommes: Le masque et le vertige*. Édition revue et augmentée. Gallimard.)。

加太 宏邦

- 2008 「観光概念の再構成」『社会志林』54(4): 27-62、法政大学。

柄谷 行人

- 1989a (1983) 『隠喩としての建築』講談社。
- 1989b 『探究II』講談社。

河本 英夫

- 1995 『オートポイエーシス——第三世代システム』青土社。
- 2000 『オートポイエーシス2001——日々新たに目覚めるために』新曜社。

川森 博司

- 2018 「観光と文化」『詳論 文化人類学——基本と最新のトピックを深く学ぶ』桑山敬己・綾部真雄(編)、pp. 205-217、ミネルヴァ書房。

ギアツ、クリフォード

- 1987 「厚い記述——文化の解釈学的理論をめざして」『文化の解釈学I』吉田禎吾他(訳)、pp. 3-56、岩波書店 (Geertz, Clifford 1973 *Thick Description: Toward an Interpretive Theory of Culture*. In *The Interpretation of Cultures*, pp. 3-30. Basic Books.)。

ギデンズ、アンソニー

- 1993 『近代とはいかなる時代か?——モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏(訳)、而立書房 (Giddens,

- Anthony 1990 *The Consequences of Modernity*. Polity Press.)。
- 1997 「ポスト伝統社会に生きること」『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三(訳)、pp. 105-204、而立書房(Giddens, Anthony 1993 *Living in a Post-Traditional Society*. In *Reflexive Modernization: Politics, Tradition, and Aesthetics in the Modern Social Order*, pp. 56-109. Polity Press.)。
- 2000 『社会学の新しい方法基準——理解社会学の共感的批判』第二版、松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳、而立書房(Giddens, Anthony 1993/1976 *New Rules of Sociological Method: A Positive Critique of Interpretative Sociologies, Second Edition*. Polity Press.)。
- クニール、ゲオルク・ナセヒ、アルミン  
1995 『ルーマン社会システム理論』館野受男・池田貞夫・野崎和義(訳)、新泉社(Kneer, Georg and Nassehi, Armin 1993 *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme: Eine Einfuehrung*. Wilhelm Fink Verlag.)。
- クリプキ、ソール・A.  
1985 (1983) 『ウィトゲンシュタインのパラドックス——規則・私的言語・他人の心』黒崎宏訳、産業図書(Kripke, Saul, A. 1982 *Wittgenstein on Rules and Private Language: An Elementary Exposition*, Basil Blackwell.)。
- クーン、トーマス  
1971 『科学革命の構造』中山茂(訳)、みすず書房(Kuhn, Thomas S. 1962 *The Structure of Scientific Revolutions*. The University of Chicago Press.)。
- 国連世界観光機関駐日事務所  
2017 『世界観光倫理憲章および関連文書——責任ある観光のために』国連世界観光機関駐日事務所。(https://unwto-ap.org/wp-content/uploads/2020/01/GCET.pdf) (最終閲覧日2022年12月23日)
- 小松 丈晃  
2003 『リスク論のルーマン』勁草書房。
- 佐滝 剛弘  
2019 『観光公害——インバウンド4000万人時代の副作用』祥伝社。
- 佐竹 真一  
2010 「ツーリズムと観光の定義——その語源的考察、および、初期の使用例から得られる教訓」『大阪観光大学紀要』10: 89-98。
- シュタイネッケ、アルブレヒト  
2018 『ドイツの観光学』富川久美子(訳)、ナカニシヤ出版(Steinecke, Albrecht 2011/ 2005 *Tourismus*, 2. vollständig überarbeitete Auflage 2011. Bildungshaus Schulbuchverlage.)。
- シュルプター、ヴォルフガング  
2009 『マックス・ヴェーバーの研究戦略——マルクスとパーソンズの間』佐野誠・林隆也(訳)、風行社(Schluchter, Wolfgang 1988 *Max Webers Forschungsprogramm*. In *Religion und Lebensfuehrung*. Band 1. Suhrkamp Verlag.)。
- 白坂 蕃  
2019 「観光の定義」『観光の事典』白坂蕃他(編)、pp. 4-5、朝倉書店。
- ジンメル、ゲオルク  
1994 「橋と扉」『ジンメル著作集12 端と扉』酒田健市(訳)、pp. 35-42、白水社(Simmel, Georg 1957/1909 *Brücke und Tür*. In *Brücke und Tür: Essays des Philosophen zur Geschichte, Religion, Kunst und Gesellschaft*.)。
- 須藤 廣  
2018a 「脱組織化資本主義社会における観光の役割」『観光社会学2.0——拡がりゆくツーリズム研究』須藤廣・遠藤英樹、pp. 15-39、福村出版。  
2018b 「観光の近代と現代——観光というイデオロギーの生成と変容」『観光社会学2.0——拡がりゆくツーリズム研究』須藤廣・遠藤英樹、pp. 63-107、福村出版。
- 須藤 廣・遠藤 英樹  
2018a 『観光社会学2.0——拡がりゆくツーリズム研究』福村出版。  
2018b 「まえがき」『観光社会学2.0——拡がりゆくツーリズム研究』須藤廣・遠藤英樹、pp. 3-10、福村出版。  
2018c 「おわりに——境界(ボーダー)をめぐる「両義性の社会学」へ」『観光社会学2.0——拡がりゆくツーリズム研究』須藤廣・遠藤英樹、pp. 236-241、福村出版。
- スミス、ヴァレレン  
2018a (編) 『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』市野澤潤平・東賢太朗・橋本和也(監訳)、ミネルヴァ書房(Smith, Valene L. (eds.) 1989 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Second Edition. University of Pennsylvania Press.)。  
2018b 「序論」橋本和也(訳)、『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』スミス(編)、pp. 1-21、ミネルヴァ書房(Smith, Valene L. 1989 *Introduction*. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Second Edition. Valene L. Smith (eds.), pp. 1-17. University of Pennsylvania Press.)。
- セルトー、ミシェル・ド  
1987 『日常実践のポイエティック』山田登世子(訳)、国文社(Certeau, Michel de 1980 *L'Invention du Quotidien. Vol. 1, Arts de Faire*. Union Générale d'Editions.)。
- 高橋 聡  
2020 「教育プログラムは人間を変えられるのか?」『教育人間論のルーマン——人間は〈教育〉できるの

- か』田中智志・山名淳(編)、pp. 181-203、勁草書房。
- 高橋 哲哉  
2015 (1998) 『デリダ——脱構築と正義』、講談社。
- 高橋 徹・小松 丈晃・春日 淳一  
2013 『滲透するルーマン理論——機能分化論からの展望』文真堂。
- 竹内 正人  
2018 『観光を学ぶために』『入門 観光学』竹内正人・竹内利江・山田浩之(編)、pp. 1-7、ミネルヴァ書房。
- 橋本 俊詔  
2021 『日本の構造——50の統計データで読む国のかたち』講談社。
- 橋本 俊詔・浦川 邦夫  
2006 『日本の貧困研究』東京大学出版会。
- 田中 智志・山名 淳  
2020a (編) 『教育人間論のルーマン——人間は〈教育〉できるのか』勁草書房。  
2020b 「ルーマンの教育システム論」『教育人間論のルーマン——人間は〈教育〉できるのか』田中智志・山名淳(編)、pp. 1-32、勁草書房。
- 玉村 和彦  
1997 『観光』『観光学辞典』長谷政弘(編)、pp. 1-2、同文館出版。
- 谷川 俊太郎  
1975 『定義』思潮社。
- 富田 恭彦  
2016 『ローティ——連帯と自己超克の思想』筑摩書房。
- 長岡 克行  
2006 『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房。
- 中井 治郎  
2019 『パンクする京都——オーバーツーリズムと戦う観光都市』星海社。
- 中川 清  
2018 『近現代日本の生活経験』左右社。
- 中村 忠司  
2019 『観光とは何か』『新・観光学入門』中村忠司・王静(編)、pp. 3-15、晃洋書房。
- 中村 高康・三輪 哲・石田 浩  
2021 『はじめに』『少子高齢社会の階層構造1 人生初期の階層構造』中村高康・三輪哲・石田浩(編)、pp. 1-7、東京大学出版会。
- 西澤 晃彦  
2010 『貧者の領域——誰が排除されているのか』河出書房新社。  
2019 『人間にとって貧困とは何か』放送大学教育振興会。
- 野家 啓一  
2007 『増補 科学の解釈学』筑摩書房。  
2008 『パラダイムとは何か——クーンの科学史革命』講談社。
- 野矢 茂樹  
2003 「訳者解説」『論理哲学論考』ヴィトゲンシュタイン(著)、野矢茂樹(訳)、pp. 223-240、岩波書店。  
2013 『「哲学探究」への道案内』『哲学探究』ヴィトゲンシュタイン(著)、丘沢静也(訳)、pp. vii-xxiv、岩波書店。  
2022 『ウィトゲンシュタイン『哲学探究』という戦い』岩波書店。
- バウマン、ジグムント  
2001 『リキッド・モダニティ——液化化する社会』森田典正(訳)、大月書店 (Bauman, Zygmunt 2000 *Liquid Modernity*. Polity Press.)。  
2008a 『個人化社会』澤井敦・菅野博史・鈴木智之(訳)、青弓社 (Bauman, Zygmunt 2001 *The Individualized Society*. Polity Press.)。  
2008b 『新しい貧困——労働、消費主義、ニューブア』伊藤茂(訳)、青土社 (Bauman, Zygmunt 2005/1998 *Work, Consumerism and the New Poor*. Second Edition. Open University Press.)。
- 橋本 和也  
1999 『観光人類学の戦略——文化の売り方・売られ方』世界思想社。  
2011 『観光経験の人類学——みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる』世界思想社。  
2018 『地域文化観光論——新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版。  
2019a 『観光とは何か——オルタナティブの試みのみ込む大衆観光』『現代観光学——ツーリズムから「いま」がみえる』遠藤英樹・橋本和也・神田孝治(編)、pp. 18-23、新曜社。  
2019b (編) 『人をつなげる観光戦略——人づくり・地域づくりの理論と実践』ナカニシヤ出版。
- 橋本 和也・佐藤 幸男(編)  
2003 『観光開発と文化——南からの問いかけ』世界思想社。
- 馬場 靖雄  
2001 『ルーマンの社会理論』勁草書房。
- ハーバーマス、ユルゲン  
1994 『第2版 公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』細谷貞雄・山田正行(訳)、未来社 (Habermas, Jürgen 1990/1962 *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*. Suhrkamp Verlag.)。  
ハーバーマス、ユルゲン／ルーマン、ニクラス  
1984+1987 『批判理論と社会システム理論(上)(下)』佐藤嘉一・山口節郎・藤沢賢一郎(訳)、木鐸社 (Habermas, J. / Niklas Luhmann 1971 *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie: Was leistet die Systemforschung?* Suhrkamp.)。

バルルディ、クラウドイオ・コルシ、ジャンカルロ・エスポジト、エレーナ

- 2013 『GLU——ニクラス・ルーマン社会システム理論用語集』土方透・庄司信・毛利康俊（訳）、国文社（Baraldi, Claudio; Corsi, Giancarlo and Esposito, Elena 1997 *GLU: Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*. Suhrkamp Verlag.）。

ハンソン、N. R.

- 1986 『科学的発見のパターン』村上陽一郎（訳）、講談社（Hanson, Norwood Russell 1958 *Patterns of Discovery: An Inquiry into the Conceptual Foundations of Science*. Cambridge University Press.）。

檜垣 立哉（編）

- 2011 『生権力論の現在——フーコーから現代を読む』勁草書房。

廣重 徹

- 1965 『科学と歴史』みすず書房。  
2002+2003 (1973) 『科学の社会史(上)(下)』岩波書店。

フーコー、ミシェル

- 1974 『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明（訳）、新潮社（Foucault, Michel 1966 *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*. Éditions Gallimard.）。
- 1986 『性の歴史 I 知への意志』渡部守章（訳）、新潮社（Foucault, Michel 1976 *Histoire de la sexualité I, La volonté de savoir*. Éditions Gallimard.）。
- 2000 「一九七六年一月七日の講義」『ミシェル・フーコー思考集成VI 1976-1977 セクシュアリテ真理』小林康夫他（編）、石田英敬訳、pp. 220-237、筑摩書房（Foucault, Michel 1994 *Dits et Écrits 1954-1988*. Éditions Gallimard.）。
- 2006 「生体政治の誕生（一九七八—一九七九年度）」『フーコー・コレクション フーコー・ガイドブック』小林康夫他（編）、石田英敬（訳）、pp. 190-201、筑摩書房（Foucault, Michel 1994 *Dits et Écrits 1954-1988*. Éditions Gallimard.）。

藤村 正之

- 2008 『〈生〉の社会学』東京大学出版会。

ブルーダー、ジェシカ

- 2018 『ノマド——漂流する高齢労働者たち』鈴木素子（訳）、春秋社（Bruder, Jessica 2017 *Nomadland: Surviving America in the Twenty-First Century*. Joy Harris Literary Agency.）。

ブルーナー、エドワード・M.

- 2007 『観光と文化——旅の民族誌』安村克己他（訳）、学文社（Bruner, Edward M. 2005 *Culture on Travel: Ethnographies of Travel*. The University of Chicago Press.）。

ベック、ウルリヒ

- 1998 『危険社会——新しい近代への道』東廉・伊藤美登里（訳）、法政大学出版局（Beck, Ulrich 1986

*Risikogesellschaft. Auf dem Weg in eine andere Moderne*. Suhrkamp Verlag.）。

- 2003 『世界リスク社会論——テロ、戦争、自然破壊』島村賢一（訳）、平凡社（Beck, Ulrich 2002 *Das Schweigen der Wörter. Über Terror und Krieg*. Suhrkamp Verlag.）。

- 2014 『世界リスク社会』山本啓（訳）、法政大学出版局（Beck, Ulrich 1999/1993 *World Risk Society*. Polity Press.）。

ベック、ウルリヒ・ギデンズ、アンソニー・ラッシュ、スコット

- 1997 『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三（訳）、而立書房（Beck, Ulrich; Giddens, Anthony and Lash, Scott 1994 *Reflexive Modernization: Politics, Tradition, and Aesthetics in the Modern Social Order*. Polity Press.）。

ホイジンガ、ヨハン

- 2018 『ホモ・ルーデンス——文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み』里見元一郎（訳）、講談社（Huizinga, Johan 1938 *Homo Ludens: Proeve ener bepaling van het spel-element der cultuur*. T. D. Tjeenk Willink & Zoon N. V.）。

ホックシールド、アーリー R.

- 2000 『管理される心——感情が商品になるとき』石川准・室伏亜希（訳）、世界思想社（Hochschild, Arlie R. 1983 *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. University of California Press.）。

堀川 紀年

- 2003 「序論 21世紀は観光の時代——期待高まる「国際観光学」」『国際観光学を学ぶ人のために』堀川紀年・前田弘・石井雄二（編）、pp. 1-14、世界思想社。

ボルフ、クリスティアン

- 2014 『ニクラス・ルーマン入門——社会システム理論とは何か』庄司信（訳）、新泉社（Borch, Christian 2011 *Niklas Luhmann*. Routledge.）。

ボワイエ、マルク

- 2006 『観光のラビリンス』成沢広幸（訳）、法政大学出版局（Boyer, Marc 1999 *Le tourisme de l'an 2000*. Presses universitaires de Lyon.）。

増田 辰良

- 2000 『観光の文化経済学』芙蓉書房出版。

松本 健太郎

- 2021 「メディアと化す旅／コンテンツと化す観光——バーチャル観光による「体験の技術的合成」を考える」『アフターコロナの観光学——COVID-19以後の「新しい観光様式」』遠藤英樹（編）、pp. 40-58、新曜社。

マトウラーナ、H. R.・ヴェレラ、H. J.

- 1991 『オートポイエーシス——生命システムとはなにか』

- 河本英夫 (訳)、国文社 (Maturana, Humbert R. and Valera, Francisco J. 1980 *Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living*. D. Reidel Publishing.)。
- マートン、ロバート・K  
1961 『社会理論と社会構造』森東吾他 (訳)、みすず書房 (Merton, Robert K. 1949 *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*. The Free Press.)。
- 溝尾 良隆  
2009 「ツーリズムと観光の定義」『観光学全集第1巻 観光学の基礎』溝尾良隆 (編)、pp. 13-41、原書房。
- 村中 知子  
1996 『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣。
- メラウ、ハンス＝ジョージ  
2018 『ラディカル・ルーマン——必然性の哲学から偶有性の理論へ』吉澤夏子 (訳)、新曜社 (Moeller, Hans-Georg 2012 *The Radical Luhmann*. Columbia University Press.)。
- モース、マルセル  
2014 「贈与論——アルカイックな社会における交換の形態と理由」『贈与論 他二篇』森山工 (訳)、pp. 51-453、岩波書店 (Mauss, Marcel 1923-1924 *Essai sur le don: forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques*. *Année sociologique*, N.S., tome 1: 30-186.)。
- モムゼン、ヴォルフガング J.  
1994 『マックス・ヴェーバー——社会・政治・歴史』中村貞二・米沢和彦・嘉目克彦 (訳)、未来社 (Mommsen, Wolfgang J. 1974 *Max Weber: Gesellschaft, Politik und Geschichte*. Suhrkamp Verlag.)。
- 2001 『官僚制の時代——マックス・ヴェーバーの政治社会学』得永新太郎 (訳)、未来社 (Mommsen, Wolfgang J. 1974 *Age of Bureaucracy: Perspectives on the Political Sociology of Max Weber*. Basil Blackwell & Mott.)。
- 柳父 圀近  
2010 『政治と宗教——ウェーバー研究者の視座から』創文社。
- 安井 眞奈美  
2009 「旅と観光」『文化人類学事典』日本文化人類学会 (編)、pp. 373-374、丸善。
- 安村 克己  
2001 『社会学で読み解く 観光——新時代をつくる社会現象』学文社。  
2004 「観光の理論的探究をめぐる観光まなざし論の意義と限界」『観光のまなざしの転回——越境する観光学』遠藤英樹・堀野正人 (編)、pp. 7-24、春風社。
- 矢野 善郎  
2003 『マックス・ヴェーバーの方法論的合理主義』創文社。
- 山口 誠・須永 和博・鈴木 涼太郎  
2021 『観光のレッスン——ツーリズム・リテラシー入門』新曜社。
- 山下 晋司  
1996a (編) 『観光人類学』新曜社。  
1996b 「観光人類学案内——〈文化〉への新しいアプローチ」『観光人類学』山下晋司 (編)、pp. 4-13、新曜社。  
1999 『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会。  
2006 「観光人類学」『文化人類学20の理論』綾部恒雄 (編)、pp. 284-301、弘文堂。  
2007 (編) 『観光文化学』新曜社。  
2009 『観光人類学の挑戦——「新しい地球」の生き方』講談社。  
2011a 「観光学を学ぶ人のために——学際領域としての観光研究」『観光学キーワード』山下晋司 (編)、pp. 2-3、有斐閣。  
2011b 「観光の定義——観光とは何か」『観光学キーワード』山下晋司 (編)、pp. 6-7、有斐閣。
- 吉田 竹也  
2003 「民族誌論覚書——20世紀人類学のパラダイムと民族誌」『アカデミア』人文・社会科学編77: 1-79。  
2005 『バリ宗教と人類学——解釈学的認識の冒険』風媒社。  
2007 「文化というまなざし——人類学的文化論覚書」『アカデミア』人文・社会科学編84: 43-125。  
2013 『反楽園観光論——バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』樹林舎。  
2016a 「ヴェーバー合理化論の基盤認識と人類学——客観性・因果連関・歴史の叙述」『アカデミア』人文・自然科学編12: 1-21。  
2016b 「バリ宗教の合理化論をめぐる再検討——ギアツからヴェーバーへ」『文化人類学』81(2): 302-311。  
2018 「合理化のパラドクスをめぐる覚書」『年報人類学研究』8: 137-149。  
2019a 「ひとつになった乙姫と白百合の現存在——恒久平和を念願する時限結社の超越過程」『人類学研究所研究論集』6: 20-57。  
2019b 「安らかならぬ楽園のいまを生きる——日本人ウブド愛好家とそのリキッド・ホーム」『人類学研究所研究論集』7: 68-109。  
2020 『地上の楽園の観光と宗教の合理化——バリそして沖縄の100年の歴史を振り返る』樹林舎。  
2021a 「観光恐慌2020年に関する覚書——観光リスク論の観点から」『アカデミア』人文・自然科学編21。  
2021b 「アノマリーとしての世界自然遺産——奄美・沖縄の事例に関する観光リスク論的考察」『島嶼研究』22(1): 109-120。  
2021c 『神の島楽園バリ——文化人類学ケースブック』

- 樹林舎。
- 2022a (2018) 『人間・異文化・現代社会の探究——人類文化学ケースブック』第2版、樹林舎。
- 2022b 「ホスト／ゲスト，ツーリスト——21世紀の液化化のなかで」『基本概念から学ぶ観光人類学』市野澤潤平（編）、pp. 31-42、ナカニシヤ出版。
- ライアン、デイヴィッド
- 2002 『監視社会』河村一郎（訳）、青土社（Lyon, David 2001 *Surveillance Society: Monitoring Everyday Life*. Open University Press.）。
- 2010 『膨張する監視社会——個別認識システムの進化とリスク』田畑暁生（訳）、青土社（Lyon, David 2009 *Identifying Citizens: ID Cards as Surveillance*. Polity Press.）。
- ラヴェッツ、J. R.
- 1977 『批判的科学——産業化科学の批判のために』中山茂他訳（抄訳）、秀潤社（Ravetz, Jerome R. 1971 *Scientific Knowledge and Its Social Problems*. Oxford University Press.）。
- ラッシュ、スコット・アーリ、ジョン
- 2018 『フロアと再帰性の社会学——記号と空間の経済』安達智史（監訳）、晃洋書房（Lash, Scott & John Urry 1994 *Economies of Signs and Space*. Sage Publications.）。
- リオタール、ジャン＝フランソワ
- 2003 (1986) 『ポストモダンの条件——知・社会・言語ゲーム』小林康夫（訳）、水声社（Lyotard, Jean-François 1979 *La condition postmoderne*. Les éditions de Minuit.）。
- ルーマン、ニクラス
- 1983a 「システム理論におけるパラダイム転換」『社会システム理論のパラダイム転換——N. ルーマン日本講演集』土方昭（訳）、pp. 3-15、御茶ノ水書房。
- 1983b 「機能的方法とシステム理論」『法と社会システム——社会学的啓蒙』土方昭（訳）、pp. 13-69、新泉社（Luhmann, Niklas 1974 *Funktionale Methode und Systemtheorie, Soziologische Aufkälung: Aufsätze zur Theorie sozialer Systeme Band 1* 4. Auflage. Westdeutscher Verlage.）。
- 1983c 「社会学的啓蒙」『法と社会システム——社会学的啓蒙』土方昭（訳）、pp. 71-124、新泉社（Luhmann, Niklas 1974 *Soziologische Aufkälung, Soziologische Aufkälung: Aufsätze zur Theorie sozialer Systeme Band 1* 4. Auflage. Westdeutscher Verlage.）。
- 1984 「機能と因果性」『社会システムのメタ理論——社会学的啓蒙』土方昭（訳）、pp. 3-49、新泉社（Luhmann, Niklas 1974 *Funktion und Kausalität, Soziologische Aufkälung: Aufsätze zur Theorie sozialer Systeme Band 1* 4. Auflage. Westdeutscher Verlage.）。
- 1986 『権力』長岡克行（訳）、勁草書房（Luhmann, Niklas 1975 *Macht*. Ferdinand Enke Verlag.）。
- 1990 『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』大庭健・正村俊之（訳）、勁草書房（Luhmann, Niklas 1973/1968 *Vertrauen: Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität*. Ferdinand Enke Verlag.）。
- 1991 『社会の経済』春日淳一（訳）、文眞堂（Luhmann, Niklas 1988 *Die Wirtschaft der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 1995 「教育メディアとしての子ども」今井重孝（訳）、『教育学年報4 個性という幻想』森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄（編）、pp. 203-239、世織書房（Luhmann, Niklas 1991 *Das Kind als Medium der Erziehung, Zeitschrift für Pädagogik* 37(1): 19-40.）。
- 1996 『自己言及性について』土方透・大沢善信（訳）、国文社（Luhmann, Niklas 1990 *Essays on Self-Reference*. Columbia University Press.）。
- 2003 『社会の法1・2』馬場靖雄・上村隆広・江口厚仁（訳）、法政大学出版局（Luhmann, Niklas 1993 *Das Recht der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2004 『社会の教育システム』村上淳一（訳）、東京大学出版会（Luhmann, Niklas 2002 *Das Erziehungssystem der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2009a 『社会の社会1・2』馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹（訳）、法政大学出版局（Luhmann, Niklas 1990 *Die Gesellschaft der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2009b 『社会の科学1・2』徳安彰（訳）、法政大学出版局（Luhmann, Niklas 1990 *Die Wissenschaft der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2012 『社会の芸術』馬場靖雄（訳）、法政大学出版局（Luhmann, Niklas 1995 *Die Kunst der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2013 『社会の政治』小松丈晃（訳）、法政大学出版局（Luhmann, Niklas 2000 *Die Politik der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2014 『リスクの社会学』小松丈晃（訳）、新泉社（Luhmann, Niklas 1991 *Soziologie des Risikos*. de Gruyter.）。
- 2015 『社会の道徳』馬場靖雄（訳）、勁草書房（Luhmann, Niklas 2008 *Die Moral der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2016 『社会の宗教』土方透・森川剛光・渡曾知子・畠中茉莉子（訳）、法政大学出版局（Luhmann, Niklas 2000 *Die Religion der Gesellschaft*. Suhrkamp.）。
- 2020 『社会システム——或る普遍的理論の要綱（上）（下）』馬場靖雄訳、勁草書房（Luhmann, Niklas 1984 *Soziale Systeme, Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp Verlag.）。
- レヴィ＝ストロース、クロード
- 1973 「マルセル・モース論文集への序文」『社会学と人類学 I』モース（著）、有地亨・伊藤昌司・山口俊夫（訳）、pp. 1-46、弘文堂（Lévi-Strauss, Claude 1968 *Introduction à l'oeuvre de Marcel Mauss*. In

- Sociologie et Anthropologie*. Marcel Mauss, 4éd, Presses Universitaires de France)。
- レーナルト、モーリス  
1990 『ド・カモ——メラネシア世界の人格と神話』坂井信三 (訳)、せりか書房 (Leenhardt, Maurice 1947 *Do kamo: la personne et le mythe dans le monde mélanésien*. Éditions Gallimard.)。
- ローティ、リチャード  
1993 『哲学と自然の鏡』野家啓一 (監訳)、産業図書 (Rorty, Richard 1979 *Philosophy and the Mirror of Nature*. Princeton University Press.)。
- 渡部 瑞希  
2021 「アフターコロナ期に向けたオンラインツアーの仕組みづくり」『アフターコロナの観光学——COVID-19以後の「新しい観光様式」』遠藤英樹 (編)、pp. 59-73、新曜社。
- (外国語文献)
- Boyer, Marc  
1982 *Le Tourisme*. 2e éd. Seuil.
- Burns, Peter M.  
1999 *An Introduction of Tourism and Anthropology*, Routledge.
- Cohen, Erik  
2005a (1996/1984) The Sociology of Tourism: Approaches, issues, and findings. In *The Sociology of Tourism: Theoretical and Empirical Investigations*. Apostolopoulos, Leivadi & Yiannakis (eds.), pp. 51-71. Routledge.  
2005b (1996/1979) A Phenomenology of Tourist Experiences. In *The Sociology of Tourism: Theoretical and Empirical Investigations*. Apostolopoulos, Leivadi & Yiannakis (eds.), pp. 90-111. Routledge.
- Du Cros, Hilary  
2007 Too Much of a Good Thing?: Visitor Congestion Management Issues for Popular World Heritage Tourist Attractions, *Journal of Heritage Tourism* 2(3): 225-238.
- Eurostat (eds.)  
2012 *Measuring material deprivation in the EU: Indicators for the whole population and child-specific indicators*, Eurostat Methodologies and Working Papers, European Commission. (<https://ec.europa.eu/eurostat/documents/3888793/5853037/KS-RA-12-018-EN.PDF/390c5677-90a6-4dc9-b972-82d589df77c2>) (最終閲覧日2022年12月23日)
- Guio, Anne-Catherine; David Gordon; Hector Najera, & Marco Pomat  
2017 *Revising the EU material deprivation variables*, Statistical Working Papers, Eurostat, European Union. (<https://ec.europa.eu/eurostat/documents/3888793/8309969/KS-TC-17-002-EN-N.pdf/da1887c3-a6b1-462e-bafb-e4f0b3fd3ab8>) (最終閲覧日2022年12月23日)
- Kroeber, Alfred & Clyde Kluckhohn  
1963 (1952) *Culture: A Critical Review of Concepts and Definitions*, New York: Vintage.
- Luhmann, Niklas  
1987 Codierung und Programmierung: Bildung und Selektion im Erziehungssystem. In *Soziologische Aufklärung IV: Beiträge zur funktionalen Differenzierung der Gesellschaft*, pp. 182-201. Westdeutscher Verlag.
- Luhmann, Niklas and Karl Eberhard Schorr  
1988 (1979) *Reflexionsprobleme im Erziehungssystem*. Suhrkamp Verlag.
- Mowforth, Martin & Ian Munt  
2016 *Tourism and sustainability: Development, globalization and new tourism in the Third World*, Fourth edition, Routledge.
- Parsons, Talcott  
1951 *The Social System*, New York: Free Press.
- Rojek, C. & John Urry  
1997 Transformations of Travel and Theory. In *Touring Cultures: Transformations of Travel and Theory*. Rojek & Urry (eds.), pp. 1-19. Routledge.
- Salazar, Noel B. & Nelson H. H. Graburn  
2014 Introduction: Toward an Anthropology of Tourism Imaginaries. In *Tourism Imaginaries: Anthropological Approaches*. Salazar & Graburn (eds.), pp. 1-28. Berghahn Books.
- Smith, Valene L.  
1981 Comments by Valene L. Smith to “Tourism as an Anthropological Subject” by Dennison Nash, *Current Anthropology* 22(5): 475.
- Townsend, Peter  
1979 *Poverty in the United Kingdom: A Survey of Household Resources and Standards of Living*, Penguin Books Ltd.
- UNSD, EUROSTAT, OECD & UNWTO  
2008 *Tourism Satellite Account: Recommended Methodological Framework (TSA: RMF 2008)*, UNSD, EUROSTAT, OECD & UNWTO. (<https://unstats.un.org/unsd/statcom/doc08/BG-TSA.pdf>) (最終閲覧日2022年12月23日)
- Urry, John  
1990 *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. Sage Publications.  
2002 *The Tourist Gaze*. Second Edition. Sage Publications.
- (ウェブページ)  
観光庁 > 統計情報・白書 > 統計情報 > 旅行・観光サテライト勘定 (TSA: Tourism Satellite Account) <http://www.mlit>.

go.jp/kankocho/tsa.html (最終閲覧日2022年12月23日)  
内閣府 > 世論調査 > 令和元年度 > 国民生活に関する世論調査 > 世論調査報告書令和元年6月調査 <https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-life/index.html> (最終閲覧日2022年12月23日)  
内閣府 > 世論調査 > 令和元年度 > 国民生活に関する世論調査 > 世論調査報告書令和3年9月調査 <https://survey.gov-online.go.jp/r03/r03-life/index.html> (最終閲覧日2022年12月23日)

みずほ情報総研 > オピニオン > コラム > 2017年のコラム > 持ち物と経験で測る貧困—物質的剥奪指標— > 福田志織「子供の貧困を考える(3)持ち物と経験で測る貧困—物質的剥奪指標」<https://www.mizuho-ir.co.jp/publication/column/2017/ch1208.html> (最終閲覧日2022年12月23日)  
Definition of Tourism (UNWTO Definition of Tourism) / What Is Tourism? (30 March 2010) <http://www.tugberkugurlu.com/archive/definintion-of-tourism-unwto-definition-of-tourism-what-is-tourism> (最終閲覧日2022年12月23日)

---

## On the Difficulty of Defining Tourism:

### From Deconstruction of the Concept to Description of the Marginal

Takeya YOSHIDA\*

At the beginning of the introduction of *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, the first collection of anthropological theses on tourism, the editor Valene Smith states “Tourism is difficult to define.” This article is intended to the theoretical considerations on the difficulty of defining “tourism.”

Rojek and Urry view tourism is a term waiting to be deconstructed. Probably that which they want to indicate is that the more we try to clear up what tourism is, the more we find out the difference or divergence in the question. Therefore, a lot of tourism researchers deliberately omit defining the concept of tourism on the grounds of, for example, the interdisciplinarity of tourism studies and the comprehensiveness or rapid change of tourism phenomena. Yet, other researchers express disapproval of such standpoints as them to advance tourism research without defining the concept. I think Smith’s standpoint might be near to the latter, for she defines a notion of tourism at the following part of the introduction despite the above statement.

In this article, I try to critically examine not only Smith’s but also several other researchers’ discussions on the definition of tourism to reconfirm the difficulty of defining the concept, i.e. reducing the implication of the concept to the bundle of some essential propositions, thence to investigate three theoretical or methodological possibilities beyond the discipline of tourism studies, which might enable us to deal with the concept of tourism without defining it. In conclusion, I argue that it is important to turn toward description of tourism phenomena, especially the marginal of them, rather than toward deconstruction of the concept.

#### Keywords

defining tourism, undefining tourism, theory of middle range, paradigm shift, description of the marginal phenomena

---

\* Nanzan University